

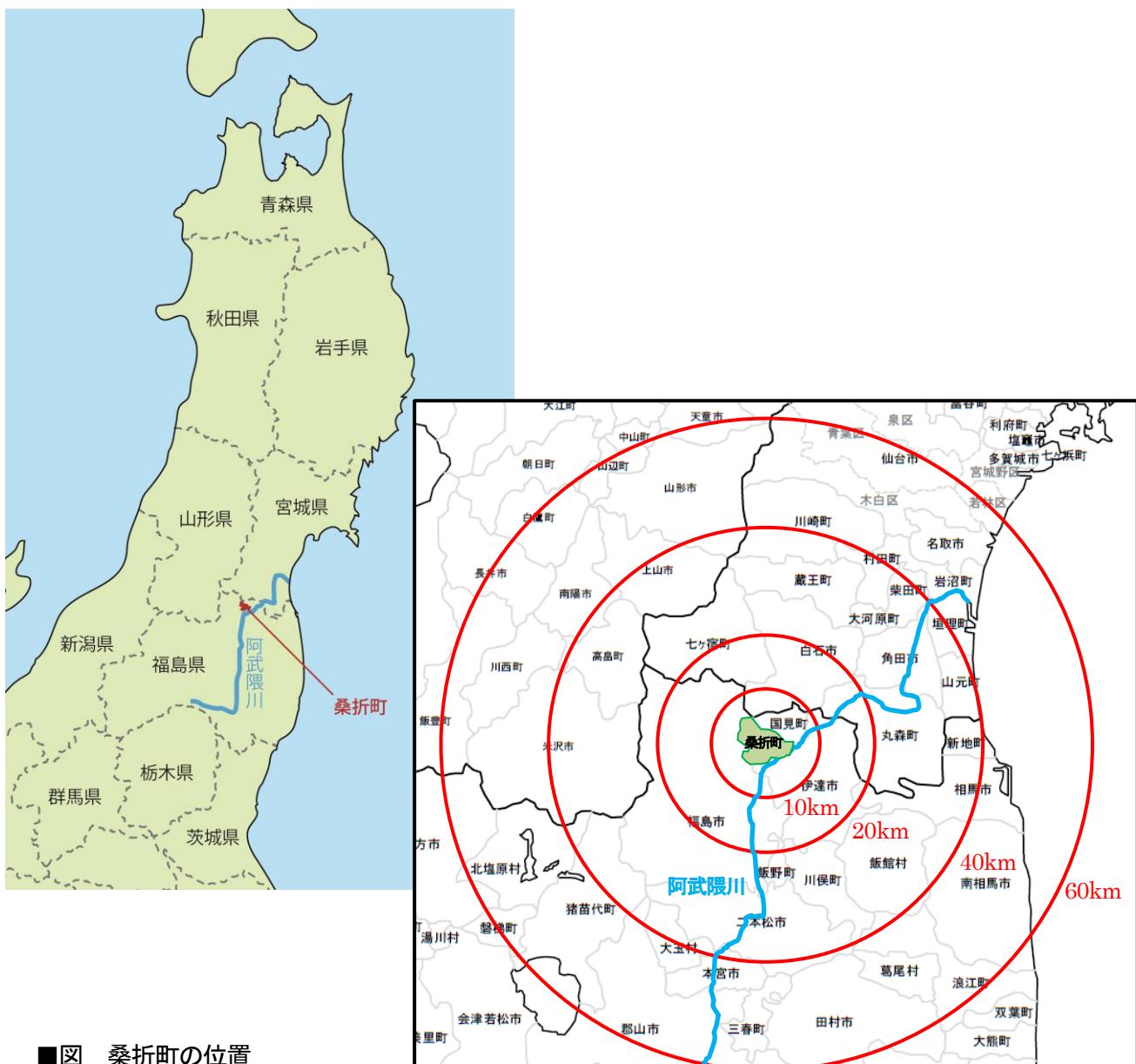
第1章 歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置等

桑折町は、福島市から約12km、宮城県仙台市から約50km、東京から約250kmの距離に位置し、福島市、伊達市、国見町、宮城県白石市の4市町に隣接している。町の面積は4,297haであり、東西約9.3km、南北約8.3kmとなっている。

福島市を中心とする福島都市圏に属し、福島市内へ通勤通学する住民が多く、福島市のベッドタウン的要素を持つ。さらに仙台市へは電車や高速道路で1時間ほどであり、移動も容易なため仙台経済圏の南端ともなっている。



■図 桑折町の位置

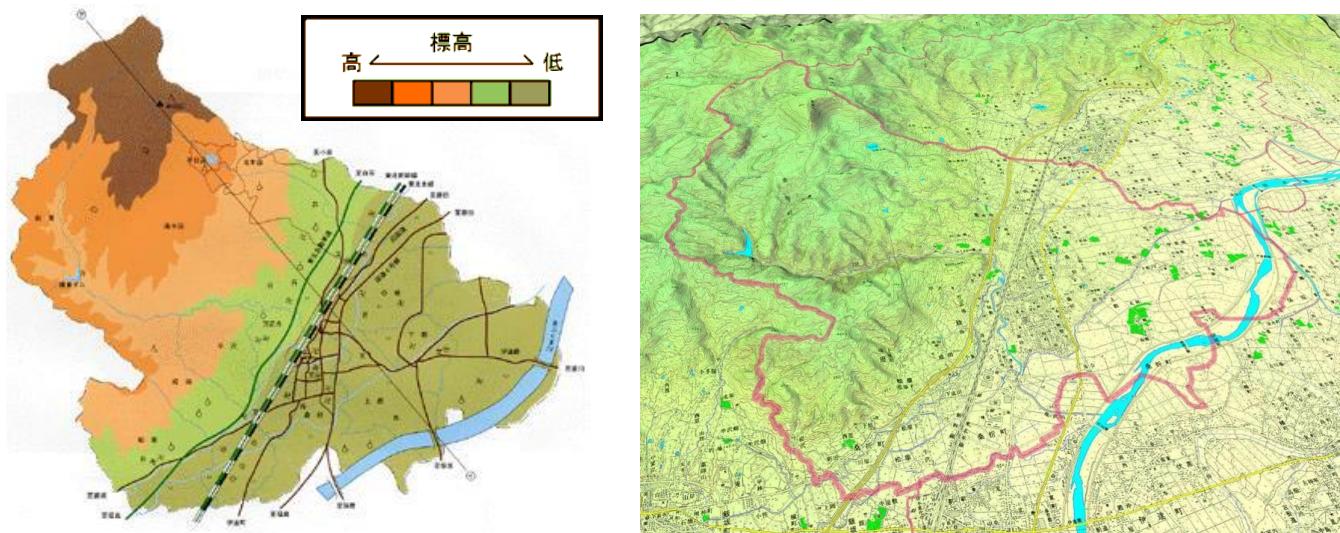
(2) 地形概況

本町は、北西部の古い地層の山地と南東部の比較的新しい盆地堆積物からなる平野に分けられる。

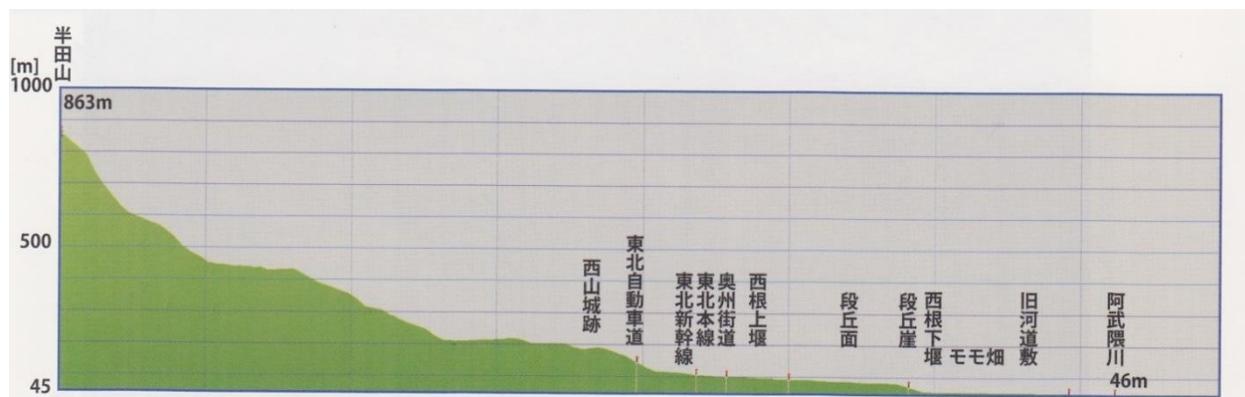
山地は奥羽山脈に連なる半田山(標高 863.1m)を最高点に、おおむね北西から南東に向かって傾斜する。主にデイサイトや流紋岩などの珪長質火山岩類と安山岩や玄武岩などの苦鉄質火山岩類で構成されている。また、半田山の南東側には流紋岩の角礫や砂・泥からなる大規模な斜面崩壊性の堆積物が分布している。これらの堆積物は、半田山の南東側斜面が崩壊することによって発生した岩屑流あるいは土石流によるものと考えられる。

町の中心部は半田山、黒山、七ツ森、平沢山など、これら北西側の山々から、普藏川、佐久間川、産ヶ沢川が流れだし、最終的に阿武隈川に注ぎ込む。これらの河川により土砂が運ばれ、大規模な扇状地が形成され、扇状地性砂礫層が広がっている。地学上「藤田面」と呼ばれるこの扇状地上に、現桑折町の中心市街地が立地している。また、山地と扇状地の境には「桑折断層」があり、これは福島市から宮城県白石市まで続いている。

南東部の扇状地縁辺部は、阿武隈川の蛇行、氾濫によって高低差 20m ほどの河岸段丘崖を形成し、段丘下は阿武隈川流域氾濫原となっており、自然堤防や旧河道の氾濫原の河床・氾濫原堆積物で構成されている。



■図 町内標高図（左：『わたしたちの町桑折』 右：日本地図センター『彩色地形図』に加筆）



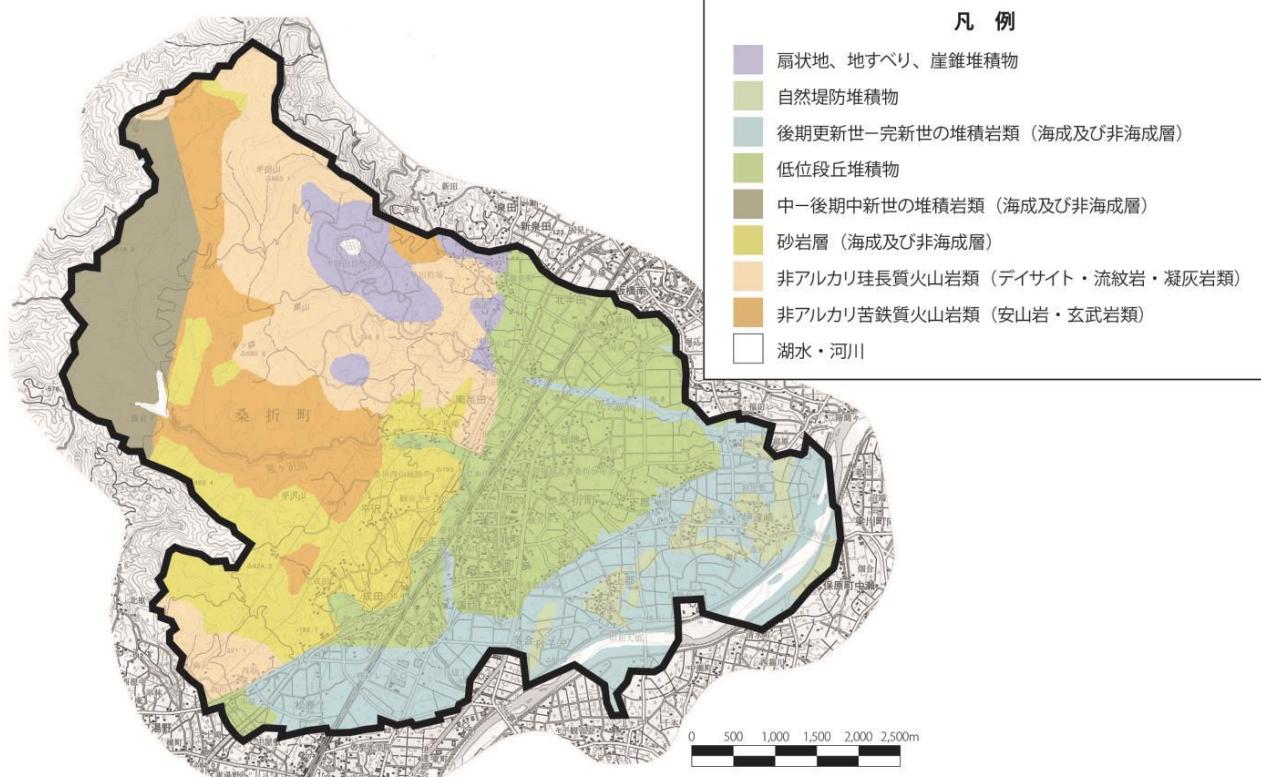
■図 半田山から阿武隈川までの断面図（『桑折学のすすめ』より）



■写真 桑折駅前から見る桑折西山城跡と半田山



■写真 段丘崖と西根下段



■図 桑折町地質図（出典：産業技術総合研究所 地質調査総合センター『20万分の1日本シームレス地質図（福島県桑折町部分）』に加筆 承認番号 第50062020-A-20160218-001号）

①山地

町の西側は奥羽山脈に連なる山地となっており、半田山をはじめ黒山、七ツ森、平沢山などの山並みがみられる。

町のシンボル的な存在である半田山には、江戸時代に日本三大鉱山の一つとして栄えた半田銀山があった¹。半田山は地滑り地形で、明治30年(1897)代の地滑り災害や、同43年(1910)の半田新沼決壊など、半田地区を中心に被害をもたらしてきた。被害の軽減を図るため、継続的に植林するなど積極的な治山事業が行われており、現在では山の中腹に存在する半田沼を中心とした半田沼自然公園として町民が自然に親しむ場となっている。

なお、東北地方太平洋沖地震により再び山肌の崩落が発生した。公園部分に大きな被害はなかったが、林野庁による復旧作業が進められている。

国の特別天然記念物「ニホンカモシカ」をはじめ、豊富な動植物が生息する。

②河川・農地

町の東側を南北に流れる阿武隈川は、古来より蛇行を繰り返し、堆積や浸食を続けてきた。桑折地区から伊達崎地区にかけて浸食痕として河岸段丘の崖地がみられる。段丘下は氾濫原となっており、多くの自然堤防が形成されて



■写真 ハート形に見える半田沼



■写真 東北地方太平洋沖地震により崩落した半田山



■図 色別標高図 (出典: 国土地理院ホームページ
地理院タイル(標高タイル)に加筆)

¹ 明治9年(1876)5月の「福島県下岩代国伊達郡半田銀山坑業記事」(桑折町史編纂委員会『桑折町史第9巻』(桑折町史出版委員会 1994年)半田銀山資料216)によると、江戸時代には佐渡国相川金山、但馬国生野銀山とともに三鉱山といわれていた。

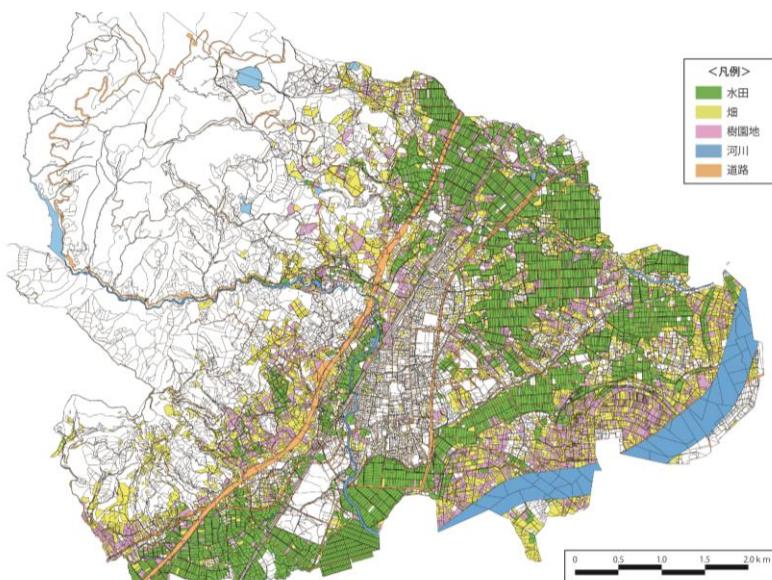
いる。阿武隈川の洪水はたびたび発生し、近年では昭和61年(1986)の8.5水害や平成10年(1998)の8.27水害など、幾度も大被害をもたらした。治水事業は明治以降継続して行われており、氾濫原は、かつては桑畑、現在はモモ畑が広がる一大果樹産地となっていっている。

阿武隈川は、鉄道が敷かれるまでは水運に利用されており、年貢米や肥料の運送に用いられ、福島県中通り地方の物流を支えた。

町内を流れる河川には、他に普蔵川、佐久間川、産ヶ沢川があるが、いずれも西側の山地から流れ出し、最終的に阿武隈川に流れ込む。また、桑折町を南北方向へ縦断するように西根堰の水路が2本伸びている。



■写真 モモ畑と半田山（桃源郷）



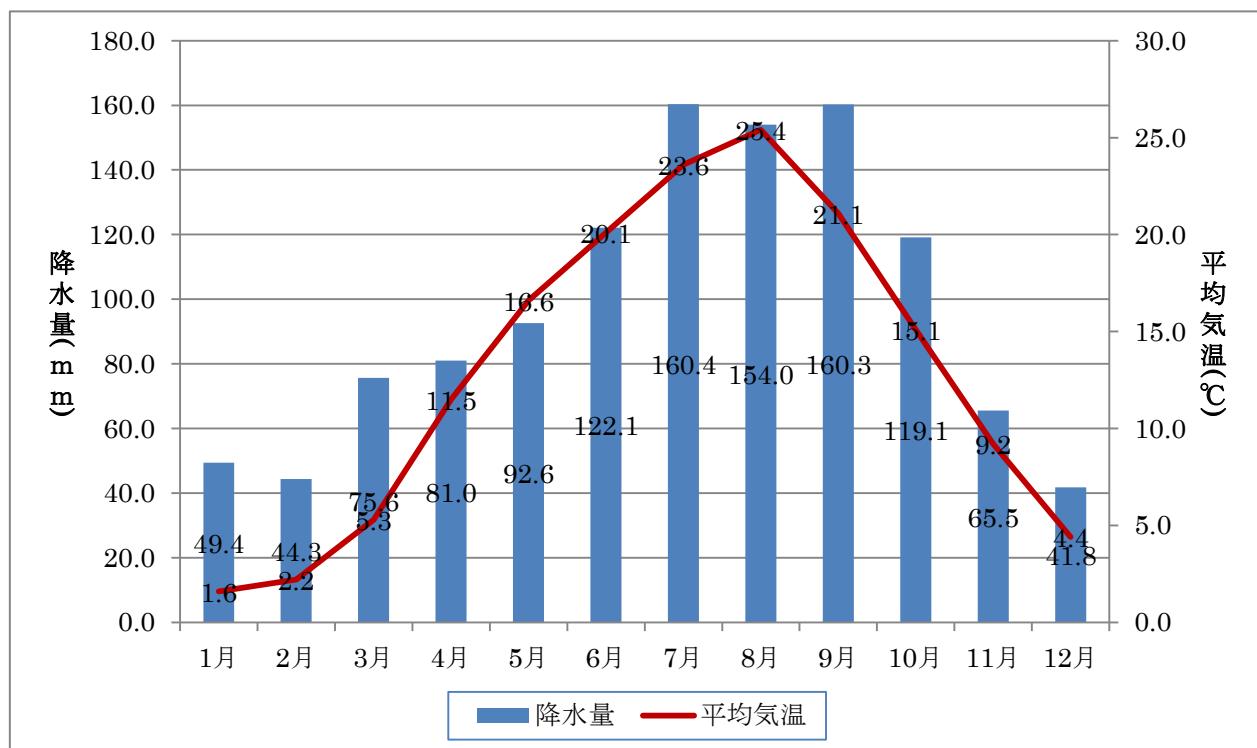
■図 桑折町の農地分布図

町内の農地の約5割が水田で、約4割がモモやリンゴを中心とした果樹畑である。桑折町は、平成6年(1994)以来、天皇家・宮家へモモを献上する産地として県から指定されており、福島県内でも有数の生産地である。モモの栽培は桑折町全域でみられるが、特に阿武隈川堤防沿いの氾濫原一帯に広がるモモ畑は、モモの花で一面ピンク色に染まることから「桃源郷」と称されている。

③気候

福島県県北地方の、昭和 60 年(1985)から平成 26 年(2014)までの 30 年間における平均気温は 13°C で、年間降水量は 1,166mm である。

福島盆地内に位置するため、夏季はフェーン現象により高温となる日も多く、県内はもとより東京などと比較しても最高気温は高めとなっている。その一方、冬は最低気温がマイナスとなる。降雪量は、会津地方や日本海側と比較すると多くはない。太平洋側気候、内陸性気候の特徴を併せ持つ地域である。

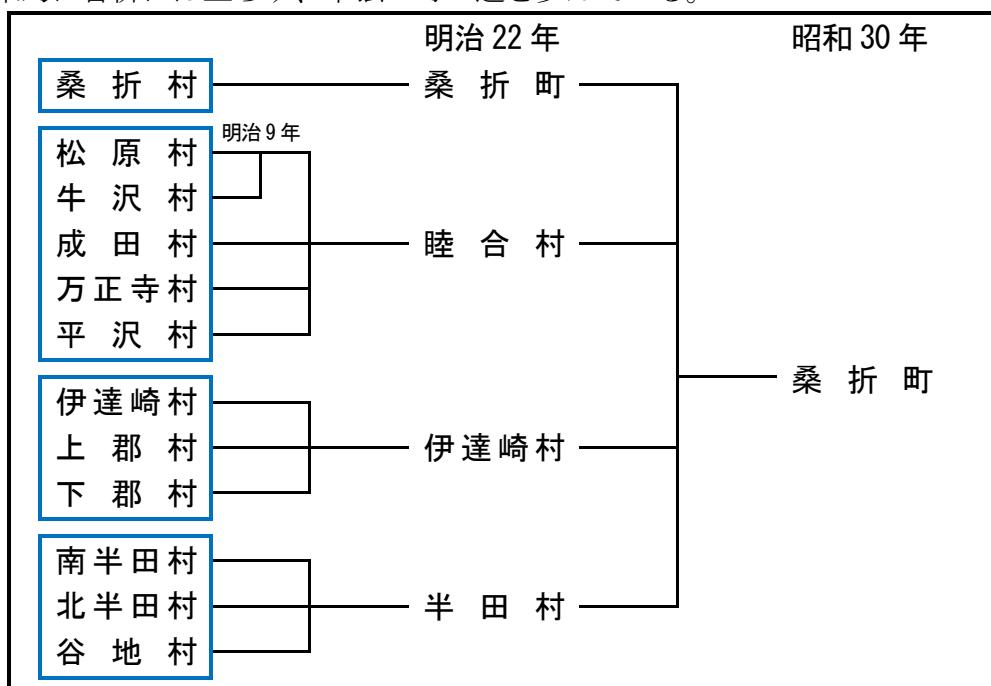


■図 過去 30 年間の平均気温と降水量（出典：福島地方気象台 観測地点：福島地方気象台）

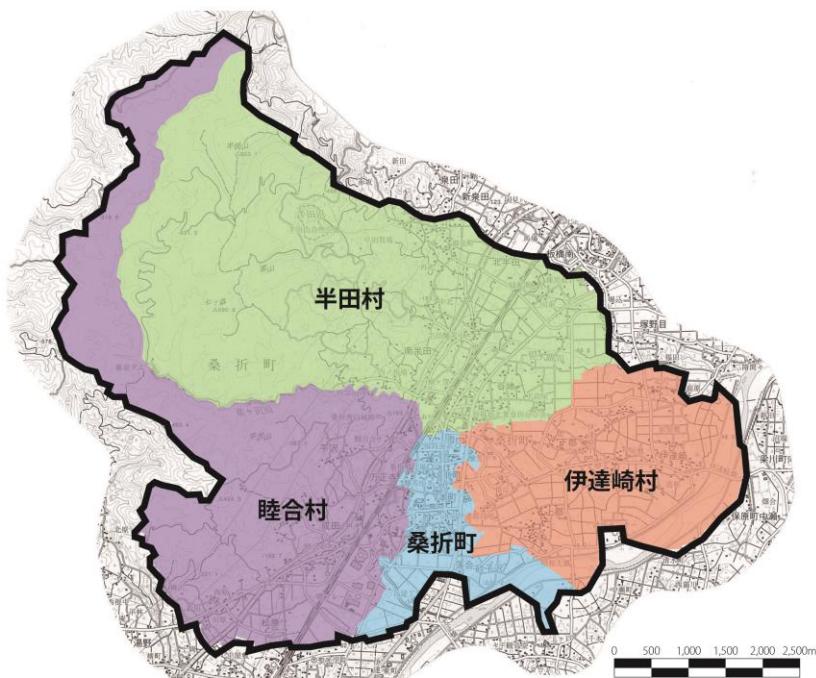
2. 社会的環境

(1) 町の沿革

明治 22 年(1889)町村制が敷かれると、それまでの 11ヶ村が 4町村となる。さらに昭和の大合併(昭和 30 年(1955) 1月 1 日)により、それまでの桑折町、睦合村、伊達崎村、半田村の 1町 3村が合併し、現桑折町となる。平成の大合併の際、近隣市町との合併が模索されたが、結果的に合併には至らず、単独立町の道を歩んでいる。



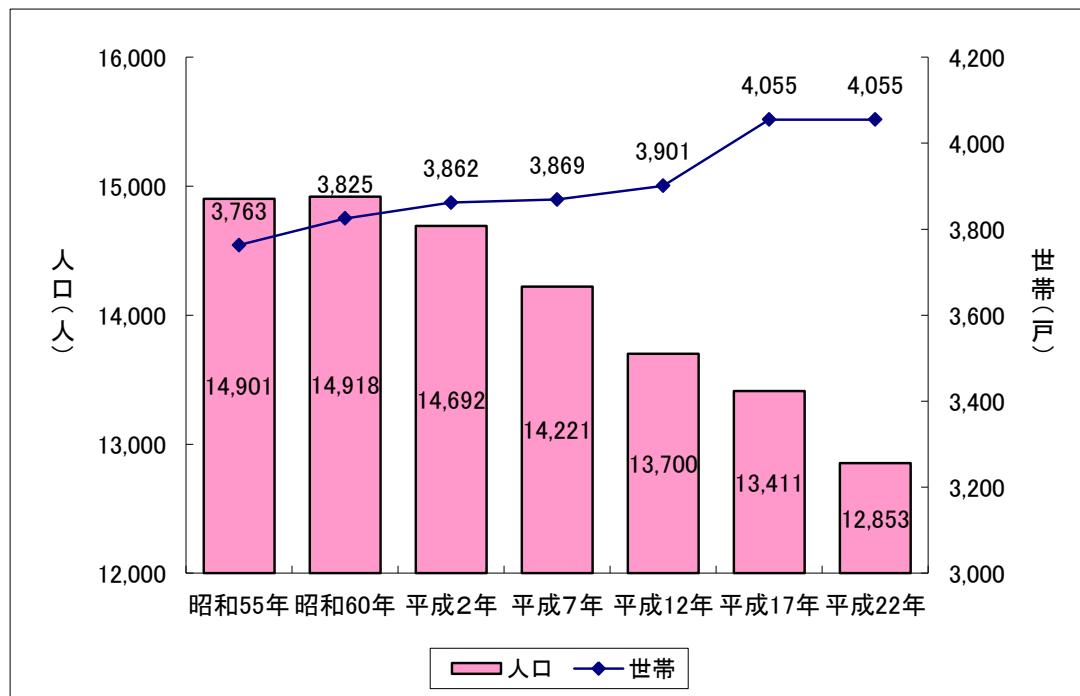
■図 町村合併の経緯



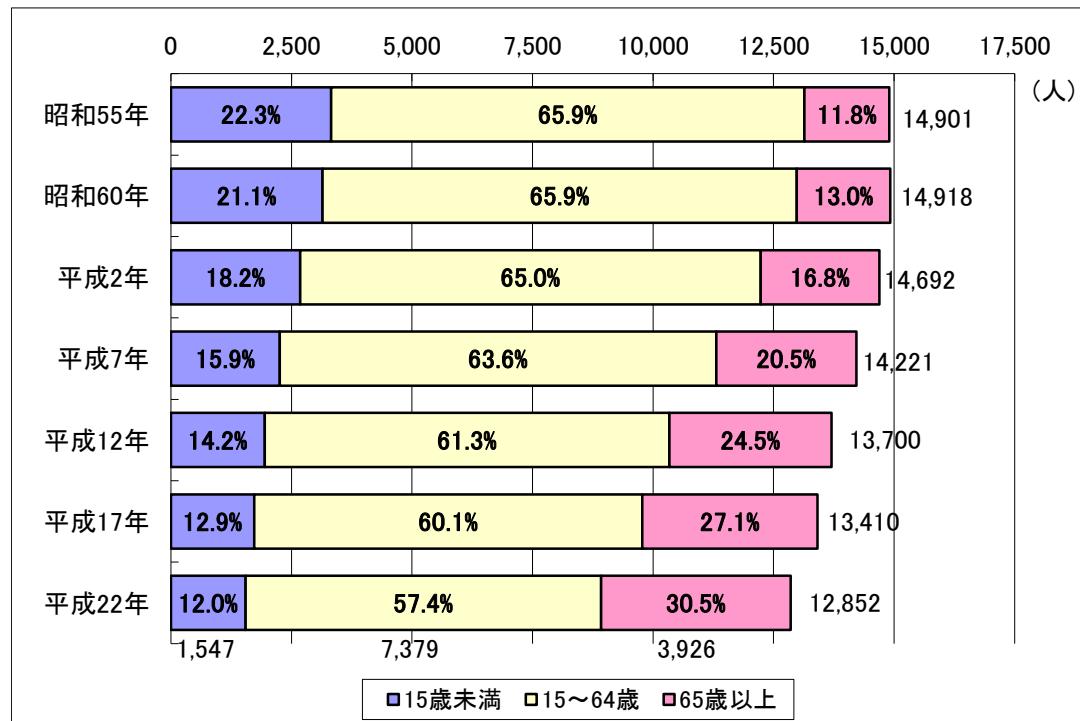
■図 昭和 30 年(1955)の合併前の町村境

(2) 人口動向

桑折町の人口は、昭和30年(1955)の合併以降、平成の初めごろまではほぼ横ばいとなっていたが、その後は減少を続けている。福島県の県北地方における人口動向とほぼ同様であり、少子高齢化が加速している。



■図 人口・世帯数の推移（出典：国勢調査）



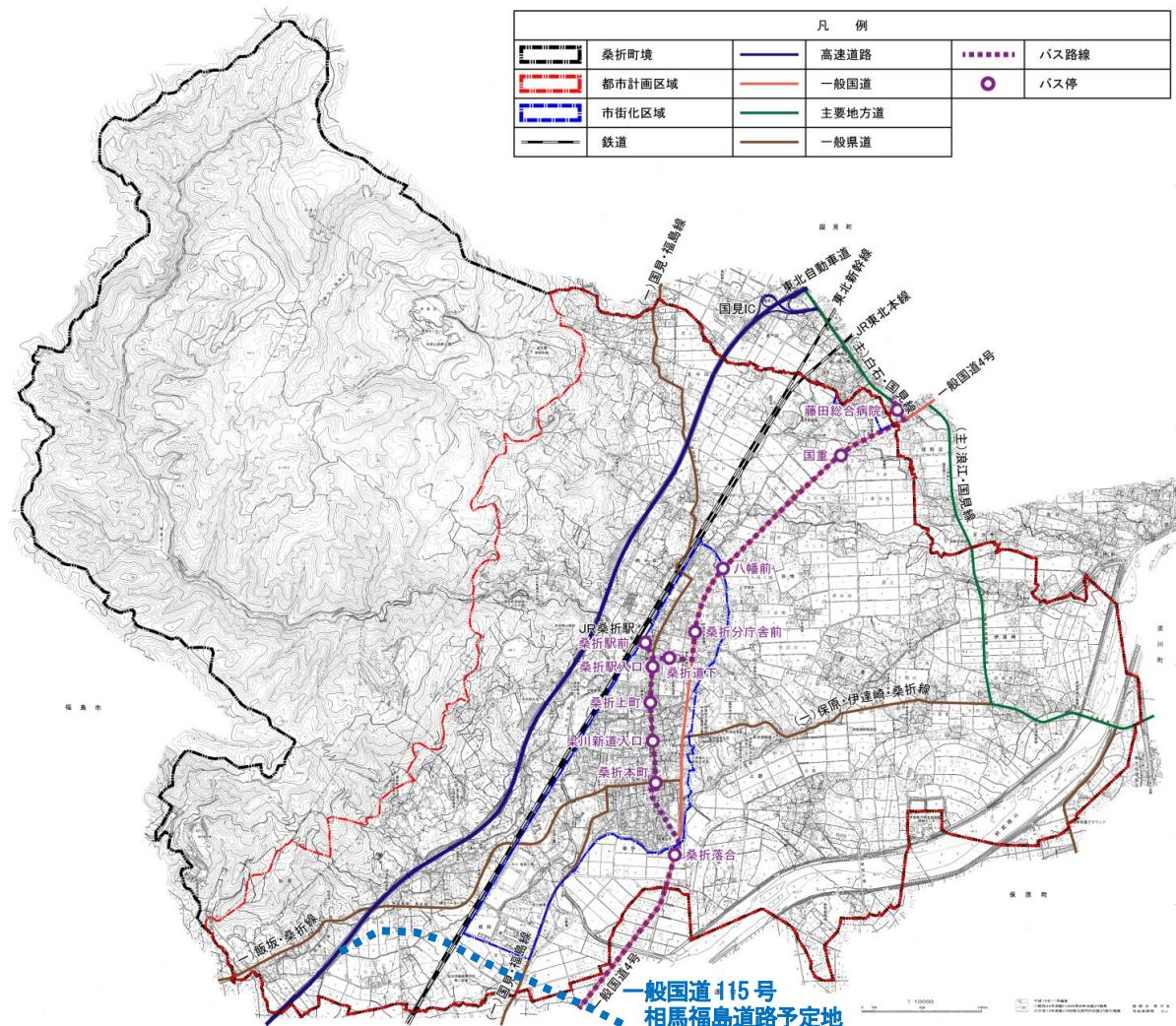
■図 年齢階層別人口の推移（出典：国政調査）※総人口は年齢不明を含まない数値

(3) 交通

桑折町の南北を縦断しているのが一般国道4号と東北縦貫自動車道(高規格幹線道路)、JR東北本線と東北新幹線、そして阿武隈川である。道路・鉄道ともに東北地方の大動脈ともいるべき基幹交通・輸送ルートである。

江戸時代には奥州街道が貫通し、谷地村字追分で羽州街道が分岐していた。両街道は東北地方の主要街道であり、参勤交代に利用されるだけでなく、仙台・山形方面から福島方面への物流を担う道であった。また、阿武隈川の舟運が開かれると、東廻り航路を経由して、江戸へ年貢米が運ばれた。桑折村の播磨館跡には年貢米を保管する蔵場が置かれ、上郡河岸は羽州街道を経由して運ばれてきた屋代郷(山形県高畠町)年貢米の積み出し港となった。

なお、東日本大震災からの復興を目的として、東北縦貫自動車道の大字松原地区より伊達市靈山を経由し相馬市へ延びる一般国道115号「相馬福島道路」が建設中であり、一般国道4号に直結するインターチェンジが伊達市との境界付近に設置される予定である。新たな物流の発生が考えられる。



■図 町の主な交通網

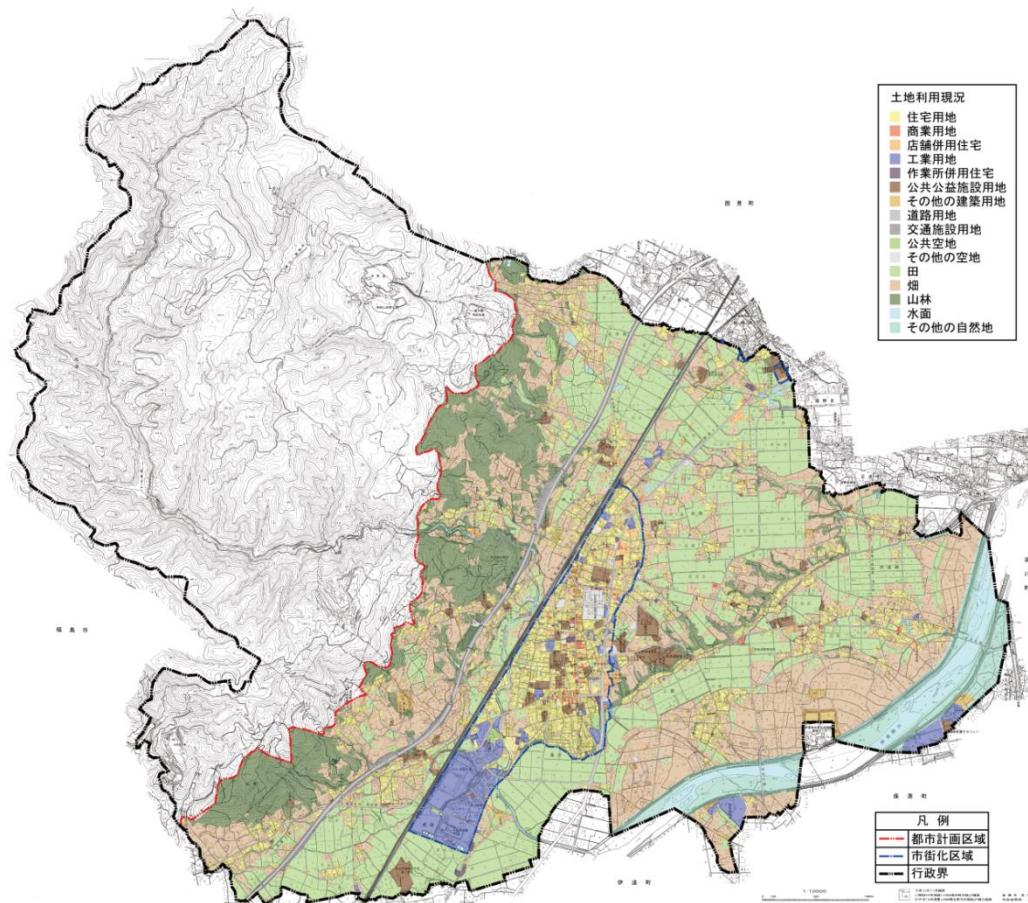
(4) 土地利用

桑折町は、総面積 4,297 ヘクタールのうち、農地、山林、水面などの自然的土地利用が約 72%を占めている（平成 22 年（2010）現在）。平成 7 年（1995）から 15 年間の推移をみると、農用地が約 90 ヘクタール減少し、宅地や道路等に転用されている。

■表 土地利用別面積

(単位：ヘクタール)

		平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年	平成 22 年
土地利用 自然的	農用地	1,160 (27.0%)	1,115 (25.9%)	1,078 (25.1%)	1,070 (24.9%)
	森林	1,779 (41.4%)	1,786 (41.6%)	1,780 (41.4%)	1,794 (41.8%)
	原野	20 (0.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	水面・河川・水路	256 (6.0%)	245 (5.7%)	245 (5.7%)	243 (5.7%)
	小計	3,215 (74.8%)	3,146 (73.2%)	3,103 (72.2%)	3,107 (72.3%)
土地利用 都市的	道路	270 (6.3%)	298 (6.9%)	301 (7.0%)	304 (7.1%)
	宅地	284 (6.6%)	288 (6.7%)	296 (6.9%)	295 (6.9%)
	小計	554 (12.9%)	586 (13.6%)	597 (13.9%)	599 (13.9%)
その他		528 (12.3%)	565 (13.1%)	597 (13.9%)	591 (13.7%)
計		4,297	4,297	4,297	4,297



■図 土地利用現況図（出典：平成 22 年（2010）都市計画基礎調査）

(5) 観光動向

平成 25 年(2013)度の福島県観光入込客統計調査では、桑折町内の観光拠点として、半田山自然公園や桑折町民研修センターうぶかの郷などが挙げられている。平成 23 年(2011)3 月 11 日に発生した東日本大震災により、各施設に相当の被害があり、さらには東京電力福島第一原発事故の風評被害の影響なども大きく、平成 23 年(2011)度以降、観光客数は完全には回復していない。

桜の開花時期の半田沼自然公園、モモの開花シーズンの阿武隈川堤防沿いにあるモモ畠付近、6 月から 7 月にかけての産ヶ沢川のほたる鑑賞など、シーズンごとの自然観賞客が多い。

また、桑折町振興公社などが中心となり、旧伊達郡役所や羽州街道分岐点、寺院(無能寺・大安寺・法圓寺・伝来寺・桑折寺など)、桑折御蔵など、桑折宿周辺の観光拠点めぐりに力を入れている。3 月の雛めぐりや 6 月下旬から 7 月上旬のホタル祭りには特に多くの来客がある。

■表 観光客の入り込み状況の推移

(単位:人)

調査年	半田山 自然公園	うぶかの郷	桃の郷祭り	町商工会青年部 主催イベント	ホタル祭り	計
平成 17 年	52,050	55,676	5,000	7,000	—	119,726
平成 18 年	55,798	57,594	7,000	—	—	120,392
平成 19 年	55,932	54,573	—	—	—	110,505
平成 20 年	49,664	52,713	—	—	—	102,377
平成 21 年	41,830	53,549	—	—	8,600	103,979
平成 22 年	37,362	48,796	—	—	10,801	96,959
平成 23 年	—	33,516	—	—	5,801	39,317
平成 24 年	16,172	43,090	—	2,475	7,654	69,391
平成 25 年	19,771	40,417	—	2,000	9,054	71,242

(出典: 福島県観光客入込状況(県勢要覧所収))



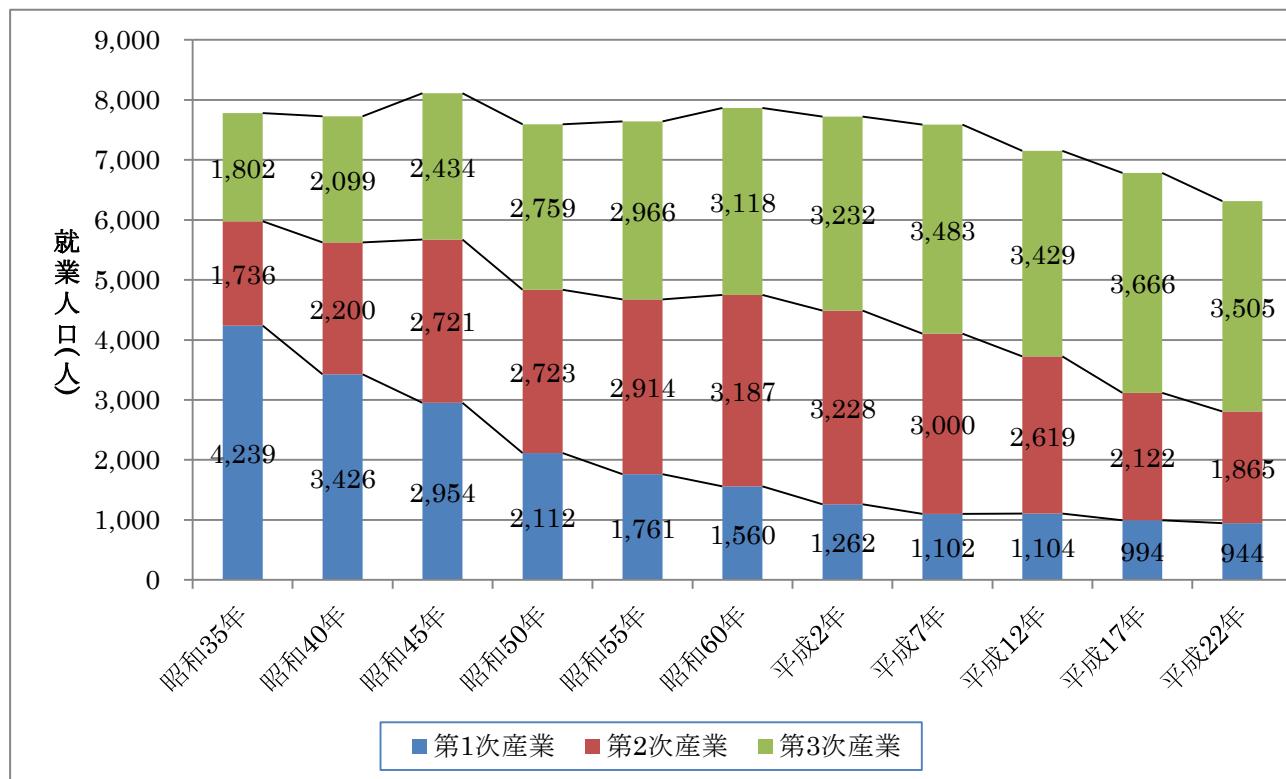
■写真 ゲンジボタルと「うぶかの郷」



■写真 こおり EXPO 2014(平成 26 年 10 月)

(6) 産業動向

平成22年(2010)の国勢調査によると、15歳以上の就業者数の合計6,382人のうち、第1次産業就業者は944人(14.8%)、第2次産業就業者は1,865人(29.2%)、第3次産業就業者は3,505人(54.9%)と、第3次産業就業者が多い。第1次産業就業者は横ばいであるものの、第2次産業が減少傾向であり、第3次産業が増加傾向にある。



■図 就業の推移 (出典:国勢調査)

①農業

かつては地域の気候や地形の特性を活かした養蚕農家が多くみられたが、時代の趨勢に伴い、桑畠は果樹畠に変わってきた。モモやリンゴ、柿などは特産品として有名であり(リンゴの“王林”は本町原産、モモの“あかつき”は天皇家・宮家に献上)、また、先人たちが築いた西根堰の恩恵を受け、水稻栽培も盛んである。

桑折町の農業就業人口、農家戸数共に減少傾向にある。そのため、農業産出額は、減少



■写真 献上桃選果式

傾向が続いている。平成 18 年(2006)は約 28 億円となっている。

なお、「2010 年農林業センサス」によると、平成 22 年(2010)現在の農地面積は、1,001 ヘクタール(経営耕地 899 ヘクタール、耕作放棄地 102 ヘクタール)である。



■写真 桑折町原産のリンゴ「王林」

■表 農業産出額、農家戸数・人口、耕地面積

	農業産出額 (名目) (百万円)	企業物価指数 (農林水産物) (2010 年基準)	農業産出額 (実質) (百万円)	農家戸数 (戸)	農業就業人口 (人)	経営耕地面積 (ヘクタール)
昭和 55 年	2,760	125.6	2,053	1,421	1,759	1,158
昭和 60 年	3,570	126.8	2,613	1,341	1,556	1,107
平成 2 年	3,488	123.3	2,675	1,286	1,260	1,088
平成 7 年	3,281	110.2	2,946	1,220	1,099	1,027
平成 12 年	2,900	104.4	2,772	1,115	1,103	979
平成 17 年	2,680	104.2	2,567	1,084	989	945
平成 22 年	—	100.0	—	1,018	937	899

(出典: 農業算出額=生産農業所得統計 農家戸数、経営耕地面積=農林業センサス 農業就業人口=国勢調査)

②商業

町の中心部の奥州街道沿いに 1.5km にも続く商店街が形成されている。この中心市街地は、江戸時代、半田銀山や蚕糸業が繁栄した時には在郷町「桑折宿」として栄えたが、車社会の到来や、福島市や伊達市に進出した大型小売店の影響を受け、低迷しており、活性化対策が課題となっている。現在は、町や商工会青年部を中心としてイベント開催やプレミアム商品券の発行などの取り組みが進められている。

一方、一般国道 4 号等の幹線道路沿いには新たな商業施設等の立地もみられるが、中心市街地とのバランスを考慮した適正な土地利用について検討していくことが求められている。

桑折町における年間商品販売額は、バブル経済期の昭和 63 年(1988)に 155 億円を記録したが、その後は減少し、平成 11 年(1999)以降は横ばい状況が続き、平成 24 年(2012)は約 94 億円となっている。また、平成 24 年(2013)における商店数は 125 件で、昭和 57 年(1982)の 227軒から 102 軒(45%)減少しており、従業員数も同様に減少傾向を示している。



■写真 旧伊達郡役所の塔屋から望む商店街通り

■表 商店数、従業員数、年間商品販売額

	商店数	従業員数 (人)	年間商品 販売額(名目) (百万円)	消費者 物価指数 (2010年基準)	年間商品 販売額(実質) (百万円)
昭和 54 年	219	756	9,549	73.1	12,118
昭和 57 年	227	823	13,523	85.0	15,552
昭和 60 年	209	804	13,481	90.3	14,789
昭和 63 年	213	796	15,515	91.0	16,912
平成 3 年	200	858	15,019	99.1	15,155
平成 6 年	175	811	13,128	102.4	12,813
平成 9 年	165	721	12,578	103.7	12,113
平成 11 年	173	763	11,452	104.0	10,994
平成 14 年	158	757	11,489	101.0	11,375
平成 16 年	149	694	8,789	100.3	8,763
平成 19 年	138	716	10,105	100.7	10,035
平成 24 年	125	631	9,351	99.7	9,380

(出典：商業統計調査)

③工業

町の南部に位置する 57 ヘクタールの「桑折工業団地」は、優良企業や住宅地に点在する工場等、30 余りの事業所を誘致し、完売状態にある。

桑折町の製造品出荷額等は、平成 25 年(2013)には約 581 億円となり、過去最高額を更新した。事業所数、従業員数は平成 2 年(1990)をピークに減少傾向が続いていたが、平成 22 年(2010)以降は横ばいの状況である。



■写真 桑折工業団地（赤色点線の範囲）

■表 従業員 4 人以上の事業所数、従業員数、製造品出荷額

	事業所数	従業員数 (人)	製造品出荷額 (名目) (百万円)	企業物価指数 (工業製品) (2010年基準)	製造品出荷額 等(実質) (百万円)
昭和 55 年	46	2,028	27,831	112.4	24,380
昭和 60 年	48	2,231	38,295	112.4	33,546
平成 2 年	53	2,599	50,908	107.6	47,039
平成 7 年	51	2,260	43,168	103.4	41,700
平成 12 年	49	2,154	42,797	99.6	42,969
平成 17 年	44	2,048	47,632	97.4	48,870
平成 22 年	38	2,192	51,872	100.0	51,872
平成 23 年	37	2,170	53,806	101.3	53,115
平成 24 年	36	1,842	40,593	99.7	40,716
平成 25 年	37	2,255	58,106	100.3	57,932

(出典：工業統計調査)

3. 歴史的環境

(1) 古代までの桑折と「桑折」地名の成立

桑折町で最も古い遺跡は約2万5千年前の中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけての平林遺跡・古矢館遺跡である。

縄文時代から弥生時代の遺跡は、調査が行なわれている林泉寺前遺跡や薩摩遺跡、二本木遺跡等で確認されているが、それほど多くはない。

古墳時代に入ると、町域北東端の大字伊達崎の北沢地区から国見町にかけて塚野目古墳群が形成され、桑折町域にも塚野目6号墳（錦木塚古墳（町史跡））が造営された。その後、塚野目古墳群に近い国見町徳江に寺院が建立され、当地方にも仏教文化が伝來した。塚野目古墳群を造営した豪族勢力は仏教文化を受容し、大和政権の地方制度のなかで、信夫郡の中心的役割を担うひとつの勢力となっていたと推定できる。律令制が導入されると、当地方は、信夫郡伊達郷に編成された。伊達郷には東山道が縦貫し、伊達駅が置かれた。

その後、信夫郡から伊達郡が分立する。その時期を明らかにすることはできないが、近隣の安達郡が安積郡から分立した延喜6年（906）ころと推定される。「桑折」の由来は、町内の大字「上郡」「下郡」の地名から判るように「コホリ」が語源であり、古代の郡衙（郡役所）²があったためと考えられている³。

(2) 伊達氏の入部と発展

平安末期、当地方は奥州藤原氏の支配下に組み込まれ、飯坂を拠点に、信夫庄司を称した佐藤氏の勢力圏内にあったとみられる。文治5年（1189）鎌倉の源頼朝が奥州藤原氏を攻めた



■写真 平林遺跡出土品（石器）



■写真 錦木塚古墳



■写真 錦木塚古墳出土品（須恵器）

² 郡衙は、古代の律令制度における郡の郡司（官人）が政務を執った役所施設を指す。郡家（ぐうけ・ぐんげ・こおりや・こおりのみやけ）ともいう。

³ 「桑折」の由来については、伊達氏入部後、諏訪神社の神託によって養蚕を奨励し、「桑島」から「桑折」と改められたという伝承もある。（桑折醸芳尋常高等小学校『桑折町郷土誌』（桑折醸芳尋常高等小学校 1940年）3ページ）

際、この佐藤氏の軍勢を石名坂で破ったのが、後に伊達氏の祖となる常陸入道念西とその子たちである。念西は、源頼朝が奥州を制圧すると、伊達郡に入部し、伊達氏を称したといわれる。この念西が伊達氏の系図で初代とされる朝宗である。大字万正寺には「伊達朝宗の墓所」があり、その周辺の下万正寺遺跡からは、源頼朝が奥州合戦後まもない建久3年(1192)に藤原泰衡の菩提を追悼するため、鎌倉に建立した永福寺と同じ文様の瓦が出土しており、伊達朝宗自身が鎌倉幕府の御家人として寺院の造営を行った可能性が極めて高い。



■写真 下万正寺遺跡から出土した瓦

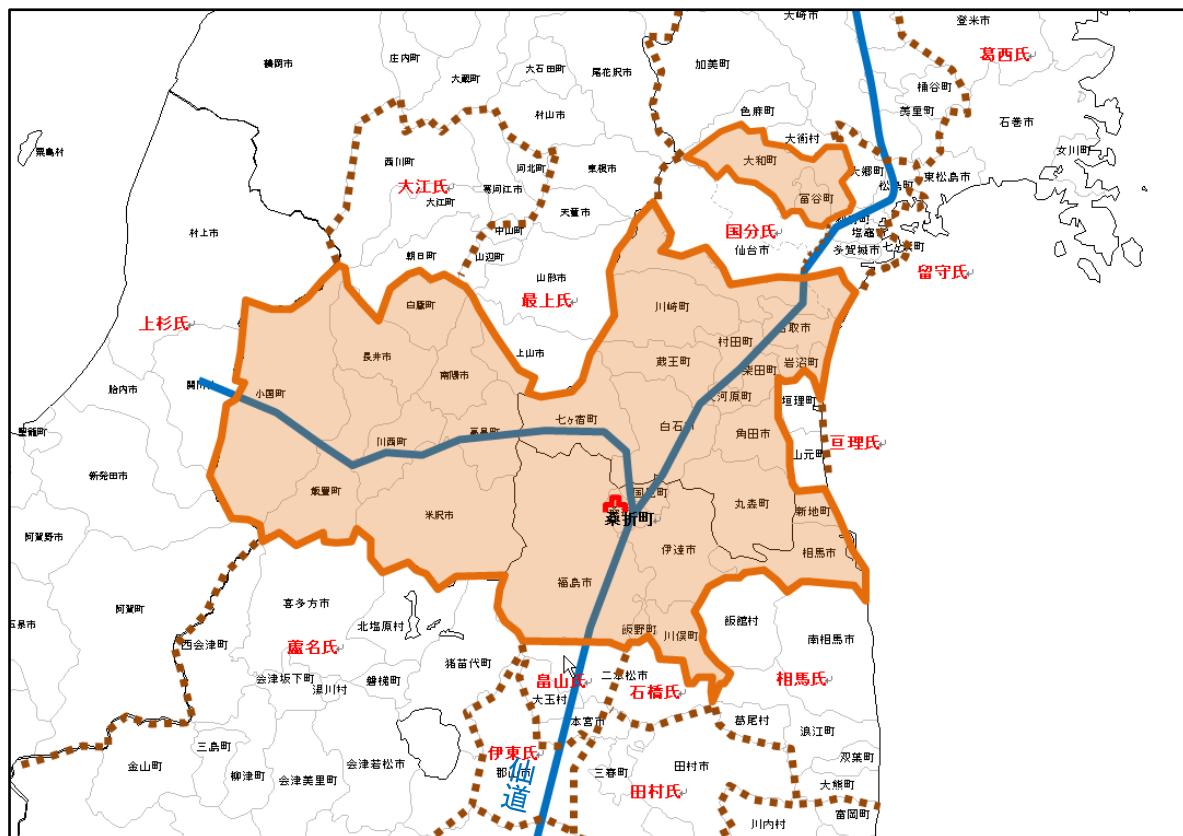
■図 下万正寺遺跡出土瓦(左)と永福寺出土瓦(右)
(『下万正寺遺跡調査報告書』より)

伊達氏は入部に際し、氏神の亀岡八幡宮とともに諏訪神社や菅原神社(天神社)を勧請したといわれる。4代政依が建立した5つの臨済宗寺院は、伊達五山と称されたが、伊達氏が仙台の領主となると、多くが仙台城下に移された。そのなかで、3代義広の菩提寺として建立された観音寺は唯一当地に残された。また、義広の庶長子親長(心円)は桑折氏の祖となるが、南北朝時代には本宗家と並立する実力を保ち、戦国時代には伊達稙宗・晴宗父子を側近として支えた。その居館は宇庫場の播磨館とされ、桑折寺(時宗)が菩提寺とされた。

鎌倉時代から室町時代にかけて、伊達氏の居館がどこにあったか、正確には分かっていないが、室町時代、9代政宗(大膳大夫)が鎌倉公方に対峙した赤館は後の桑折西山城とみられている。11代持宗が大仏城(後の杉目城、福島城)で鎌倉公方に敗れた後、4代にわたり、伊達郡東根の梁川城を本拠とする。伊達氏は南北朝時代以降、次第に実力を蓄え、戦国時代に入ると、室町幕府のもとで奥州支配を担当し



■図 歴代伊達氏当主(初代から17代(仙台藩初代)まで)



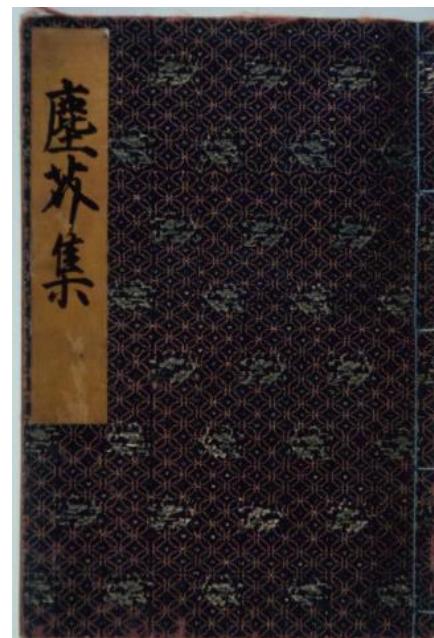
■図 西山城時代（伊達稙宗時代）の伊達氏の領地

ていた奥州探題大崎氏をしおぐまでに成長していった。

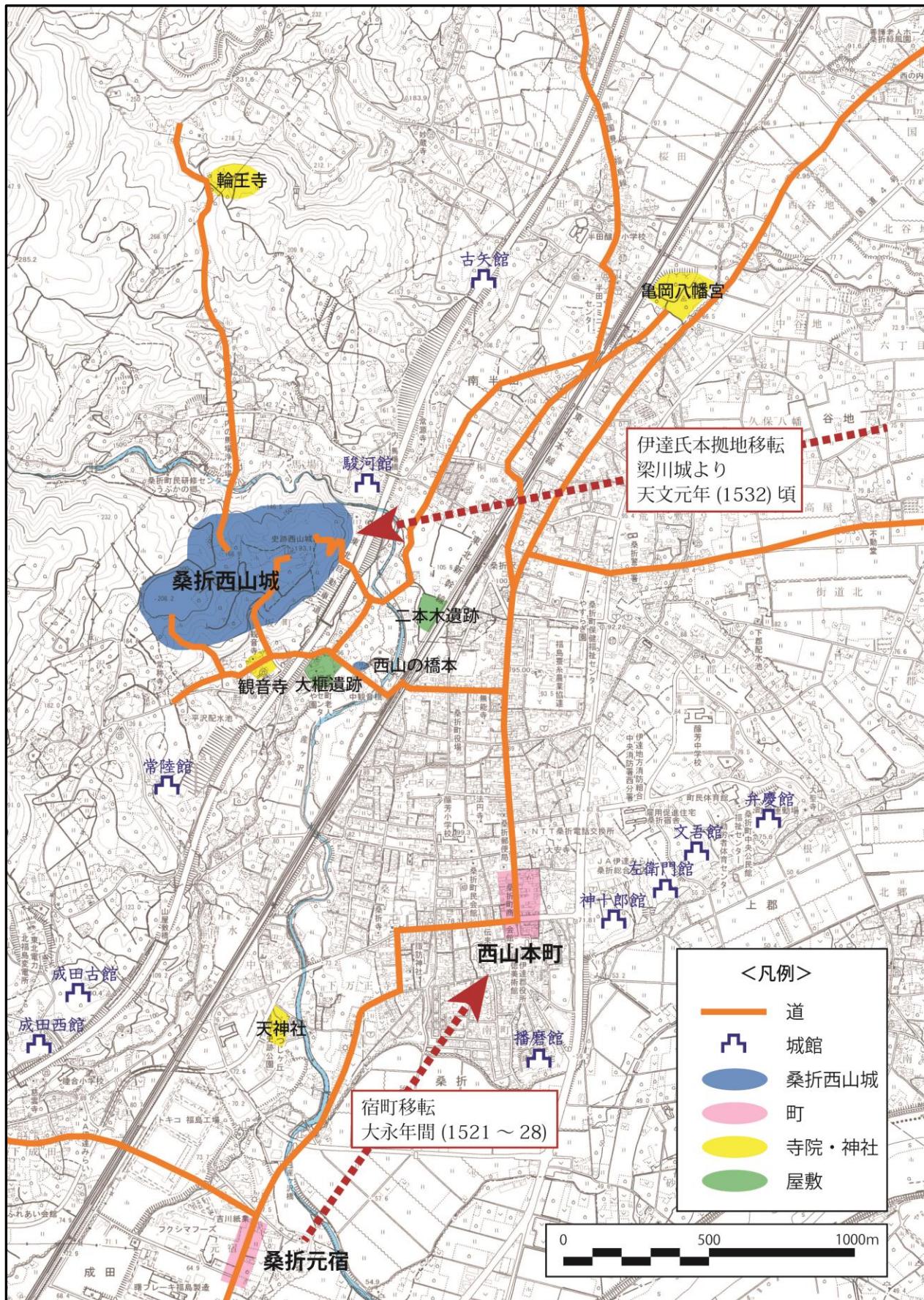
大永2年(1522) 14代稙宗は陸奥国守護職に推薦されると、天文元年(1532)頃、西山城を築き、梁川城より本拠を移した。西山城に入城した稙宗は、天文4年(1535)に「棟役日記」を、同7年(1538)「段錢帳」を作成した。同5年(1536)に作成した戦国家法「塵芥集」にはしばしば「守護」という文言が登場する。稙宗が陸奥国守護として分国の支配を強化しようとした意図が窺われる。

しかし、これら稙宗の政策は家臣等の反発を招き、同11年(1542)から7年間、嫡子晴宗と対立し、南奥羽を戦乱に巻き込む、いわゆる「天文の乱」に発展する。西山城は争奪の対象となり、最終的には晴宗有利のなかで和睦が結ばれた。そのときの条件として西山城は壊され、家督を継いだ晴宗は、戦乱時に拠点とした米沢に本拠を移した。

晴宗の孫、17代政宗は、米沢を拠点に南奥州に巨大勢力を築いたが、天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原北条氏攻めに参陣し、臣下に入った。その後、秀吉の奥羽仕置によって、岩出山(宮城県大崎市)に移され、本貫の地を離れたが、後に仙台城を築き、62万石という全国有数の大大名となった。



■写真 嘘芥集(村田本 仙台市博物館所蔵) 重要文化財



■図 戦国時代の桑折

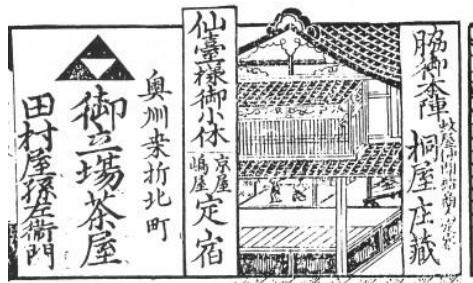
（3）幕藩体制下の桑折～産業・交通の発展～

天正 19 年(1591)政宗が岩出山に移されると、当地方は会津の領主として伊勢から移封された蒲生氏郷の領地となった。さらに慶長 3 年(1598)、上杉景勝が入封したが、徳川家康と対立し、同 5 年(1600)関ヶ原合戦に際しては、会津で兵を挙げた。この際、旧領奪還を目論む伊達政宗と伊達・信夫両郡各地で戦闘があった。関ヶ原で石田三成が敗れると、上杉氏は所領を 30 万石に減らされて米沢を本拠としたが、桑折周辺の信夫・伊達両郡は引き続き上杉領となった。

減封された上杉氏にとって、残された領地での増産は急務であった。当地方では、桑折村の佐藤新右衛門の尽力によって、すりかみ摺上川から取水した西根堰が上下2本開発された。西根下堰は、元和4年(1618)佐藤新右衛門が米沢藩の下長井郷代官須田善右衛門の協力を得て開削した、湯野村字八卦から伊達崎村北沢に至る約14kmの用水路である。一方、西根上堰は寛永元年(1624)、信夫郡代古河善兵衛の協力を得て着工し、同10年(1633)に完成させた。湯野村字穴原(現在の福島市飯坂町)から取水し、五十沢村(現在の伊達市梁川町)に至る延長約29.2kmの用水路である。また、以前より行われていた養蚕業が奨励され、自然堤防や河道跡によって遮断されて西根堰からの引水ができず、水稻栽培に不適な阿武隈川氾濫原を中心に桑の栽培が行われた。



■写真 役場脇を流れる西根上堰



■写真 商家高名鑑



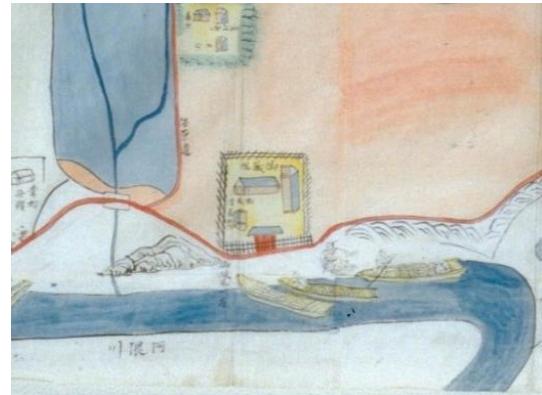
■写真 羽州街道跡(北半田 早田
伝之助邸脇)

寛文4年(1664)、米沢藩3代藩主綱勝が急死し、吉良義央の子綱憲を養子とした際、30万石の領地は15万石に減封され、信夫・伊達両郡と置賜郡屋代は幕府の直轄領となった。

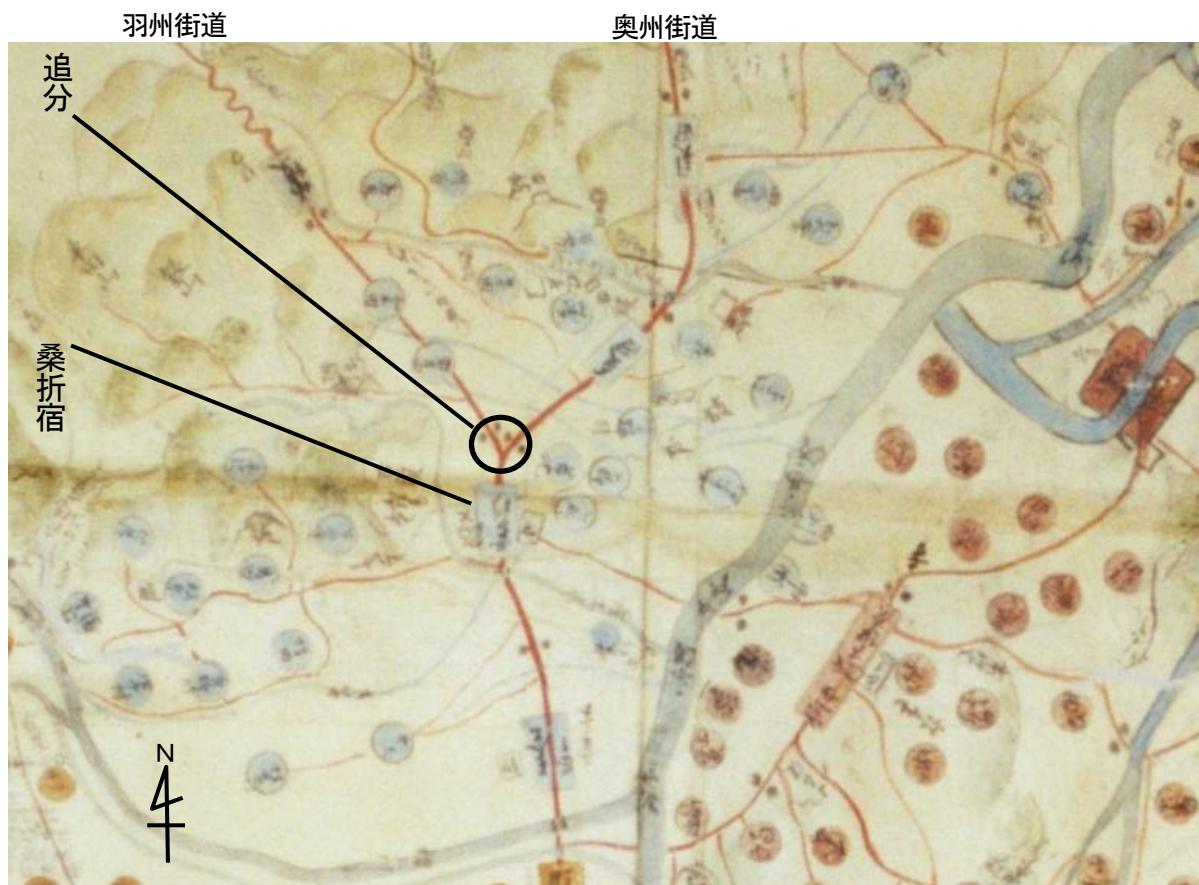
寛文年間(1661～73)に阿武隈川舟運が開発され、同10年(1670)には、河村瑞賢が東回り航路と連絡する福島から荒浜(現在の宮城県亘理町)までの舟運も整備した。これを利用して信夫・伊達両郡及び出羽国屋代郷の幕府領の年貢米が江戸へ回送されるようになった。

延宝7年(1679)、本多忠国が大和国郡山から福島に移封されると、桑折も本多氏の支配下に入った。本多氏は福島城とその城下町が手狭であったため、万正寺の西館(桑折西山城跡)に築城計画を立てたが、天和2年(1682)、姫路に転封されたため、築城も取りやめとなった。

信夫・伊達郡は、再び幕府領となるが、貞享3年(1686)堀田氏が福島に入封すると、福島に置かれていた幕府代官所は桑折に移された。幕府領桑折陣屋の成立である。

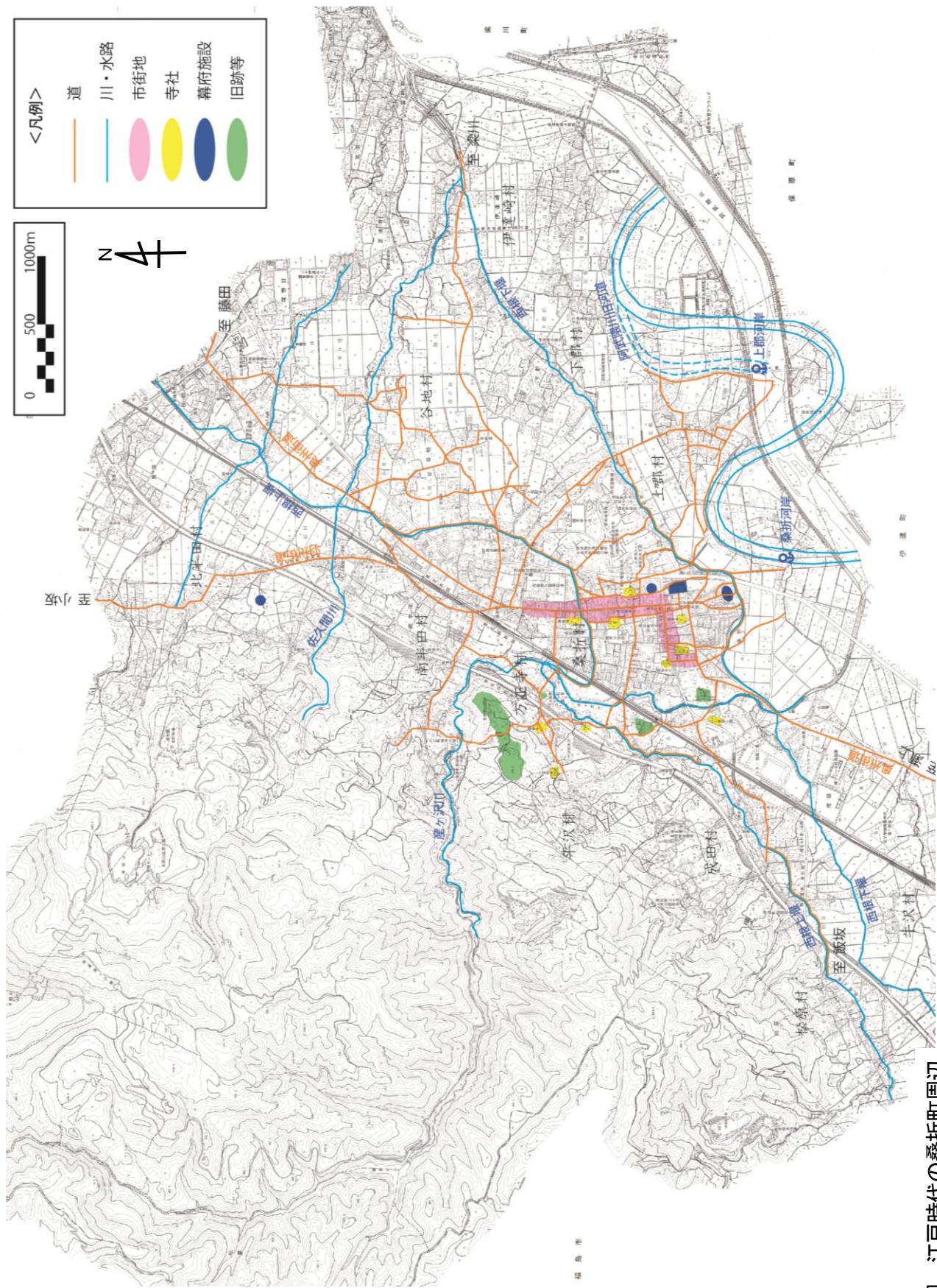


■写真 上郡村絵図(河岸部分)



■写真 江戸時代の桑折宿周辺(「奥州達忍図」(部分・加筆) 大分市 中根忠之氏蔵)

本多氏領時代。桑折宿で奥州・羽州街道が分岐している。



元禄13年(1700)、松平(奥平)忠尚は伊達郡2万石を与えられ、桑折藩が成立する。松平氏の治政下、半田銀山で優良な鉱脈が発見されると、松平氏は鉱山とその周辺を幕府に差し出し、延享4年(1747)には上野国に転封となつた。これにより、桑折周辺は再度幕府領となる。

半田銀山は、桑折町半田地区から国見町大字泉田まで広がる鉱山であったが、この幕府領化の原因が半田銀山の本格的採鉱を目的としていたため、佐渡金山を経営する佐渡奉行の管轄下に置かれた。以後、幕府直轄鉱山として幕末まで経営され、佐渡、生野とともに「日本三大鉱山」として繁栄した⁴。越後や最上などから鉱山労働者が集まってきたが、当地で亡くなった人々の墓が無縁仏として半田地区に点在している。

間歩と呼ばれる銀山の坑口は、山師によって開発された。成功した山師たちは、衰退していた観音寺の復興に尽力した。観音寺は伊達氏が鎌倉時代に伊達五山のひとつとして創建したと伝えられ、伊達氏天文の乱で敗れた植宗方についたため衰退し、臨済宗から天台宗、浄土宗と改宗を繰り返し、仙台へも移転されなかつた。江戸時代前期には、現在の坂町観音堂が「観音大仏」として残るだけとなつていて⁵。17世紀以降、半田銀山の山師野村勘左衛門を中心となり、堂宇の再建、仏像の補修を図り、復興していったのが現在の観音寺である。

幕府領化により、寛延2年(1749)桑折代官が復活し、以後、仙台藩預かりのとき以外、明治維新に至るまで代官が陣屋に赴任して政務に当たつた。桑折代官所は時に14万石を支配する大きな代官所であり、半田銀山の経営も併せて行ったため、経験豊富な代官が任命されることが多かつた。

幕府代官所が再設置されたころから、信夫・伊達



■写真 半田銀山絵図



■写真 桑折村絵図（陣屋部分）
(大聖寺所蔵大字上郡文書)



■写真 桑折代官寺西重次郎封元の墓所
(無能寺)

⁴ 「福島県下岩代国伊達郡半田銀山坑業記事」前掲『桑折町史第9巻』半田銀山資料216

⁵ 「桑折西山城付近絵図」(宮城県図書館所蔵) 絵図は本計画書54ページに掲載。

両郡は、ひとりの領主の支配下に置かれるのではなく、また両郡に本拠を置く領主のみならず、遠方の領主の飛び地領が入り混じる「入り組み支配」の様相が顕著になってきた。当町域では、桑折村が幕府代官所所在地であったが、隣接する上郡村は白河藩領、松原村は福島藩領というように村ごとに支配者が異なる状態になっていた。

■写真 蚕種銘鑑(中井閑民著 1860)

17世紀中頃、下総国結城地方の養蚕業が水害によって大きな被害を受けると、信夫・伊達地方の養蚕が注目されるようになった。上杉氏以後の領主も養蚕業を奨励し、伊達崎村や粟野村(伊達市梁川町)などで品種改良が進められた結果、安永2年(1773)幕府から「奥州蚕種本場」銘を許されるほどに品質が向上し、蚕種の一大産地となった。

桑折宿は奥州街道の宿場であり、本陣や脇本陣、問屋場などがあったが、半田銀山の山師や労働者達の消費活動を支えるという役割も持っていたため、酒造業や飲食業、鍛冶屋が多いという特徴ある町場であった。周辺が蚕種の一大産地となると、生糸売買のための定期市が開かれるようになった。幕府領から運ばれてきた年貢米が納められる蔵場が置かれ、阿武隈川の桑折河岸や上郡河岸から舟運で江戸まで出荷された。江戸時代後期になると、蚕種も船の積荷となり、また、阿武隈川を遡行する便によって、良質な桑の生産に使用するための肥料である干鰯や塩などが運ばれてくるようになった。このように、桑折宿は宿場町に加えて在郷町としての役割をもつようになり、地域の経済や流通の重要な部分を担うようになつていった。

（4）明治維新後の桑折と旧伊達郡役所の建造

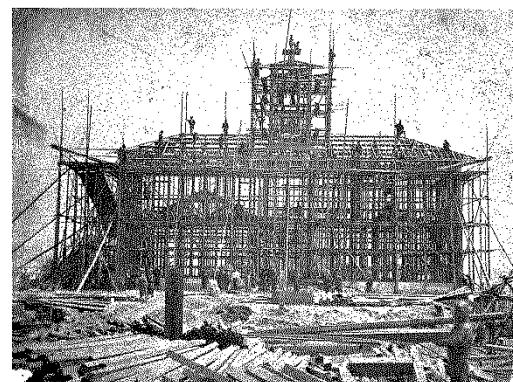
戊辰戦争に際して、奥羽両国には、幕府側として戦った藩が多かったため、桑折地方もこの戦乱に巻き込まれた。戦乱に備え、仙台藩は桑折西山城跡（現在砲台場と呼ばれる郭）や産ヶ沢河畔などに砲台を設置した⁶。奥羽越列藩同盟軍は福島から撤退し、桑折を一時的に拠点としたが、盟主であった仙台藩が慶応4年（1868）9月13日に降伏すると、旧幕府領や同盟側に立った福島藩から没収された所領は新政府の直轄地となり、明治4年（1871）以降、支配地は再編、統合され、福島県へと編成されていった。

■写真 「釀芳」の書

⁶ 「日録」桑折町史編纂室編『桑折町史叢書第3集』(桑折町史編纂委員会 1986年)17 ページ

明治9年(1876)、奥州街道は一般国道4号に認定され、官道となった。この年、明治天皇は東北行幸に際して半田銀山を訪問、その翌日の仙台巡幸途上の2度、無能寺境内の桑折学校が休憩所となつた。この行幸に随行した木戸孝允が「醸芳」の額を揮毫した。この「醸芳」という名称は、醸芳小学校、半田醸芳小学校、醸芳中学校、醸芳幼稚園、半田醸芳幼稚園と醸芳保育所というように、現在でも使用されている。

江戸時代の現桑折町域には桑折村、南半田村、北半田村、谷地村、上郡村、下郡村、伊達崎村、万正寺村、平沢村、成田村、松原村、牛沢村があつたが、明治9年(1876)に牛沢村が松原村に併合された。明治12年(1879)7月22日に郡区町村編制法が公布されると、当初伊達郡役所は保原村に置かれたが、明治16年(1883)桑折町の誘致活動の末に移転する。桑折の庁舎は地元の寄付金等で建設され、10月8日に開庁式が行われた。この年、桑折警察署と連合戸長役場の庁舎も建造されているが、郡役所や警察署の桑折移転は、県庁の所在する福島と幹線国道で直結するという立地条件によるものであった。これらの庁舎の新設に加え、明治19年(1886)西町に桑折学校が和様折衷様式で建造され、梁川、保原、飯坂への三方道路が敷設された。町場は江戸時代より在郷町としての役割を持っていたが、幕末の開港により、輸出用生糸や蚕種の集散地となつた。半田銀山は鹿児島藩出身の五代友厚により、近代鉱山として生まれ変わつた。桑折は文字通り伊達郡の政治・経済の中心であった。明治22年(1889)に市町村制が施行されると、旧村は合併して、桑折町と半田村、伊達崎村、睦合村の1町3村に再編された。



■写真 建造中の伊達郡役所



■写真 半田銀山の本坑坑口

(5) 郡制の廃止と戦前・戦後の桑折町

郡制の廃止により郡役所が大正12年(1923)に廃されると、旧桑折町は伊達地方の政治の中心という地位を失つた。半田銀山は明治の再興以来、江戸時代には製錬しきれずに廃津となつてゐた鉱石の再製錬を主に行つてゐたが、原料の枯渇と、明治30年(1897)代の半田山地滑り被害により、生産量が減少、赤字経営に陥つた。これらは、伊達郡の経済の中心でもあった旧桑折町にとつては大きな打撃となつた。

さらに昭和恐慌の影響により、当地方も深刻な不況に見舞われた。養蚕業の中心地帯であった伊達崎村では、蚕糸の暴落により経済に打撃をこうむったが、その対策として昭和7年(1932)から匡救事業が行われ、経済の再建が図られた。同年、旧桑折町では、郡は製糸工場の誘致に成功する。一方で養蚕業の衰退によって、桑畠は果樹畠へと転換が進められ、特にモモ、リンゴは当町の主力農産品となっていました。

モモの生産は明治24年(1891)ころから養蚕農家の副業として導入された。また、昭和18年(1943)に伊達崎村上郡の大槻只之助が品種改良して作り出した「王林」は、現在でも青りんごの主要銘柄となっている。

しかしながら、戦時体制になると、当地方も無関係ではいられず、各方面に暗い影を落とした。郡は製糸工場も戦時下、軍需工場化が図られたが、幸い、空襲を受けることはなかった。金属を中心に物資が不足するなか、町内の寺院も、梵鐘を供出するよう求められたが、歴史的価値があるものとして、観音寺や伝来寺、大安寺は供出を免れている。

半田銀山の衰退も収まらず、経営が五代家から日本鉱業に移ったが、昭和25年(1950)には事実上の閉山となった。

昭和24年(1949)、伊達果実農業協同組合が設立され、養蚕業からの転換作物である果樹栽培を強化する方策が始められる。

それまでの小規模な自治体の合併が政策的に推進されるなかで、昭和30年(1955)には中心市街地桑折町を中心に伊達崎村、睦合村、半田村が合併し、新桑折町が誕生した。これは、合併町村の経済活動の中核となっていた桑折市街地を中心とした枠組みであった。その後、新桑折町では、小学校や農協は各地区に残して構成旧町村の独自色を維持する一方、中学校のように統一できる部分は一元化し、町制を進めてきた。

平成10年(1998)代からの「平成の大合併」では、桑折町、国見町、伊達町、保原町、梁川町、靈山町、月館町による合併協議会を平成15年(2003)に設置し、伊達郡西根及び東根の枠組みにおいて、地域再編を模索した。しかし、阿武隈川西岸にあり、主要交通路が福島市や国見町と通じている桑折町にとって、川向かいの東根地域との経済的な結びつきや住民の交流が比較的希薄であることから、自治体として一体化しにくいという、江戸時代以来の



■写真 郡は製糸工場



■写真 合併祝賀記念写真

課題があった。翌年、結果的に桑折町は合併協議会を離脱、この枠組みを大きく動かすことなく、桑折町は単独立町で進むこととなり、平成27年(2015)1月1日に合併60周年を迎えることとなった。

(6) 交通の要衝・桑折

桑折西山城築城の際、町場を移転させ街道を再整備したことが現在の桑折市街地の原型になったと考えられるが、参勤交代制が整えられた江戸時代初期、寛永19年(1643)ごろ成立したのが「桑折宿」である。伊達氏在城時に成立した本町を基礎に、北町、上町、西町、新町と町場が伸長して宿が形成されたと考えられる。現存する最古の絵図は、天和年間(1681~84)ごろに描かれた「奥州桑折之図」(大分市 中根忠之氏蔵)である。この絵図には、すでに二度クランクする奥州街道や江戸側の新町と仙台側の上町に構えられた木戸や、今でも現存する寺社が明記され、現在の形がほぼ出来上がっていたことがわかる。



■図 「奥州桑折之図」(部分 大分市 中根忠之氏蔵)

幕府領となってから、桑折代官所として陣屋が本町南東に置かれた。北町から本町にかけて、西根堰より取水した用水溝が宿場の中央を流れ、代官所方向に向かうことから逆川と呼ばれていた。本町には、米沢藩で郡役を務め西根堰の開削を行った佐藤新右衛門家があり、その役宅は桑折宿本陣としても利用されていた。さらに、陣屋の南には蔵場があり、年貢米を保管しておく倉庫として使われていた。この蔵場から上郡村にあった阿武隈川の河岸場に運ばれた米は、舟運によって江戸へ輸送された。替わりに桑などの商品作物を栽培するための肥料を中心とした様々な物資が当地方にもたらされた。

桑折宿は、江戸時代を通して奥州街道の宿場町であり、羽州街道の始点という交通の要衝

として、米や蚕種、銀などの物資の集散地として栄えてきた。江戸時代後期には、これらの他、絹糸・真綿・紅花などが出荷され、太物・小間物などが持ち込まれた。特に蚕種は、関東から上方、西国にまで出荷されていたという⁷。桑折宿では、定期市が毎月2と8のつく日の計6回開かれた。また、諏訪神社の祭礼時に諏訪市も開催されたが、これは当地方で最も大きな市の一いつであった。半田銀山の隆盛、養蚕業の発展により、桑折宿は周辺農村部や鉱山地域の経済活動を担う、在郷町として繁栄した。

元禄2年(1689)5月3日、俳人松尾芭蕉は「おくのほそ道」の旅で、飯坂から馬で桑折入りし、ここから歩いて伊達の大木戸を目指している。桑折宿で句は詠んでいないが、それから30年後の享保4年(1719)、この地方の蕉風俳諧の中心的人物であった桑折宿本陣の佐藤馬耳は、芭蕉追慕のため、芭蕉が須賀川で詠んだ「風流の初めや奥の田植唄」の短冊を法圓寺境内に埋めて「芭蕉翁」と刻んだ田植塚を造るとともに、記念の句集「田植塚」を発行した。馬耳が交通の要衝の本陣主人という立場で、大名や江戸・上方の文化人から文芸を吸収し、さらに得たものを周辺地域に発信していた。その後、桑折宿やその周辺からは、俳人の遙阿や石翁、幕末には、国学の研究や和歌・漢詩に秀でた安藤野雁を輩出し、狂歌・俳諧隆盛の中心的位置を占めた。

阿武隈川舟運は、寛文年間(1661~73)、上杉氏減封後の幕府領であった時期に、河村瑞賢が中心となって開発した。現桑折町域には、桑折河岸・上郡河岸・伊達崎河岸が置かれた。



■写真 田植塚(法圓寺)



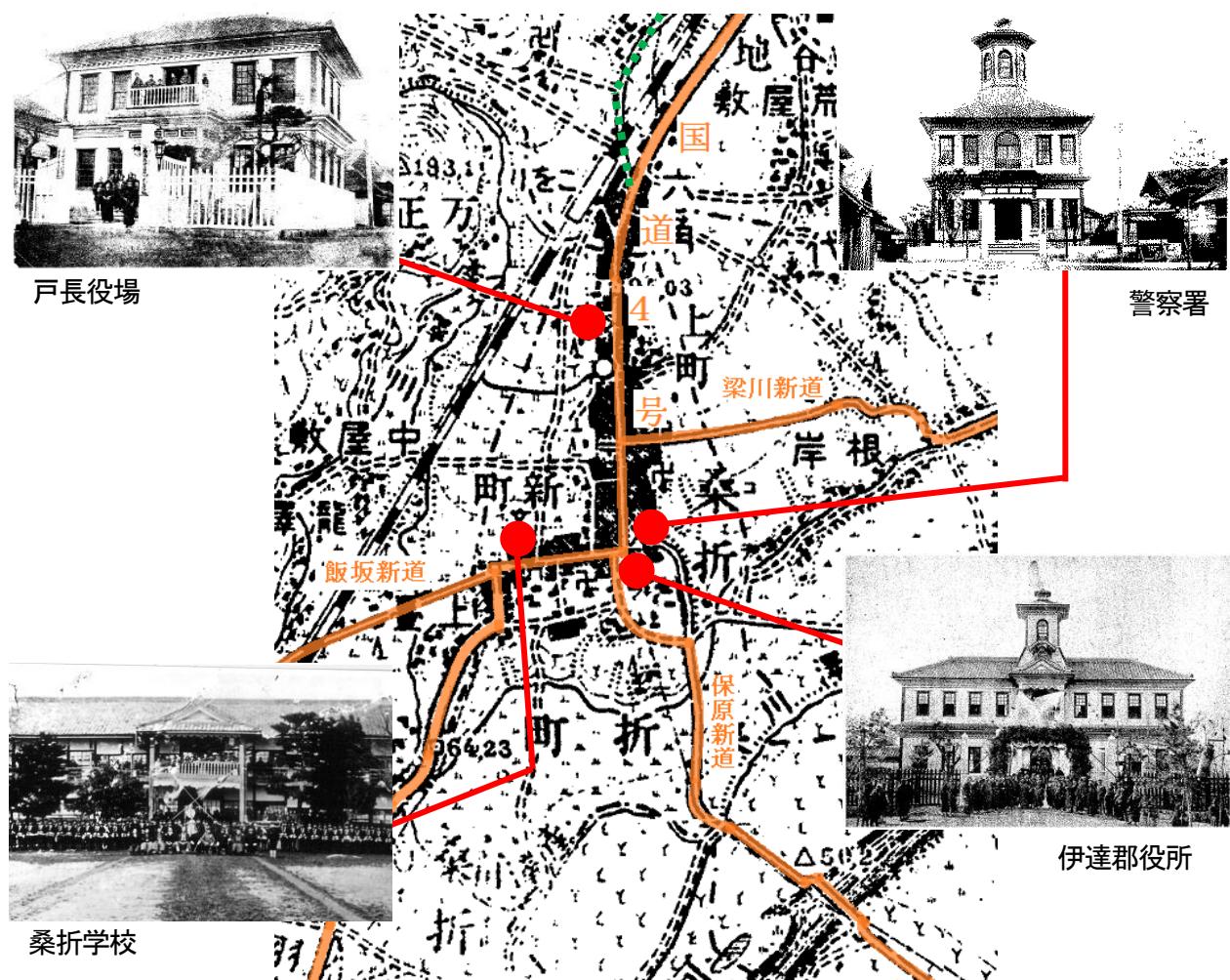
■図 「桑折村絵図」(部分 寛政期 大聖寺所蔵 大字上郡文書)

⁷ 「奥州伊達信夫郡道中筋案内」桑折町史編纂委員会『桑折町史第6巻』(桑折町史出版委員会 1992年)近世史料 285

舟運は主に年貢米の輸送に用いられ、桑折宿の南端の播磨館跡には蔵場が置かれた。また、上郡河岸にも蔵場が造られ、幕府領出羽国屋代郷（山形県高畠町）の年貢米の中継地となつた。江戸時代中期には、大豆も輸送され、幕末になると、川下から干鰯、鍋釜、石炭などの肥料や生活物資が運び込まれるようになった。

明治時代、地租改正の際に作成された地図からは、江戸時代から続く宿場町特有の間口が狭い、短冊状町割りを確認することが出来る。この特徴により、いったん火災が発生すると、延焼を免れず、大火になることも多かった。そのため、明治維新後は、街道に面した店舗部分に、比較的火に強い蔵造が採用されることが多くなった。

伊達郡役所は、官民挙げた熱心な誘致活動により、明治 16 年(1883)、本町通り南端突き当たりに建造された。また、警察署が西町通りの東端突き当たりに、連合戸長役場が上町の道路に張り出すように、桑折学校が新町通りの北端突き当たりに、いずれも擬洋風建築によって建造され、景観が大きく改変された。明治 20 年(1887)には、北町から東へ梁川新道が、郡役所西側から南へ向かい保原新道が、桑折寺南側から西へ向かう飯坂新道がそれぞれ敷設され、従来の町割りを保ちつつも新しい街並みへと変化していく。



■図 明治 41 年(1908)の地図（桑折町市街地）



■写真 市街地の様子(明治末か)



■写真 鉄道開通以来の煉瓦橋アーチ

明治維新後、舟運による年貢の江戸回米はなくなったが、幕末から明治前期にかけての養蚕隆盛による蚕種や生糸の輸送量が増大し、半田銀山も五代家の経営によって出鉱量が回復したため、輸送手段として舟運の役割が減少することはなかった。明治 17 年(1884)には、上郡村の大槻儀左衛門たちが外輪蒸気船を導入した舟運を企画したが、まもなく開通した鉄道に顧客を奪われ、また、船が浅瀬で座礁する事故もあって廃業した。現在は船着場跡に記念に植えたという「蒸気のサクラ」が残っている。

明治 20 年(1887)、郡山—仙台間に鉄道が開通、桑折には停車場(駅)が設置された。この時、福島—仙台間で停車場が置かれたのは桑折・白石・大河原・岩沼のみであり、桑折が伊達郡の政治経済の中心であったことがわかる。鉄道の開業は当地方の流通を一変させ、鉄道による貨物の大量運搬は、それまで主流であった阿武隈川舟運を衰退させることとなった。一般国道 4 号から停車場へ駅前通りが開設されると、停車場前には運輸業者や倉庫会社が進出、市街地が北の木戸跡からさらに北方に伸びた。



■図 大正期の桑折

戦後、昭和33年(1958)に一般国道4号のバイパス道路が新しく町の東側を通りようになり、「弾丸道路」と呼ばれたが、奥州街道に由来する旧国道は、そのまま県道となった。

昭和30年(1955)、1町3村が合併して新桑折町が誕生すると、しばらく旧桑折町役場を庁舎としたが、同32年(1957)、西根上堰に沿った桑折宿西側裏手に新庁舎が建造された。このころから、田畠だった桑島地区、南町地区、旧半田村内の追分地区などが宅地として開発され、市街地は桑折宿の外側へ大きく広がった。しかし、桑折宿以来の市街地は、短冊状の町割りもそのままで、重要文化財の旧伊達郡役所をはじめ、寺院の堂宇は神社の社殿、通りに面した町家や店舗、蔵など歴史的建造物が多く残されている。

平成23年(2011)3月の東日本大震災により、町内では多くの建物が全壊や半壊の被害を受け、それはこれらの土蔵にも及んだ。桑折宿に残されていた土蔵造の建物のうち、いくつかは復旧することができず、取り壊されてしまった。しかし、以下に挙げるような現存する建造物が、まだ多く残され、桑折宿の風景を今に伝えている。



■写真 上町 無能寺総門と参道

冠木門の総門。明治14年(1881)の行幸時に整備した。



■写真 北町 安達家(安達屋)

明治建造。木造二階建の店舗。



■写真 北町 栗花家(石田屋)

明治39~40年建造。蚕種を扱うため、土蔵造で二階通側に窓がない。



■写真 北町 伊藤家(藤屋)

明治建造。木造二階建の菓子店。



■写真 北町 鈴木家(丸屋)
明治建造。土蔵造の呉服店。



■写真 本町 斎藤家(扇屋)
明治建造。土蔵造の肥料店。



■写真 本町 村松家(村松商店)
土蔵造の燃料店。明治建造。



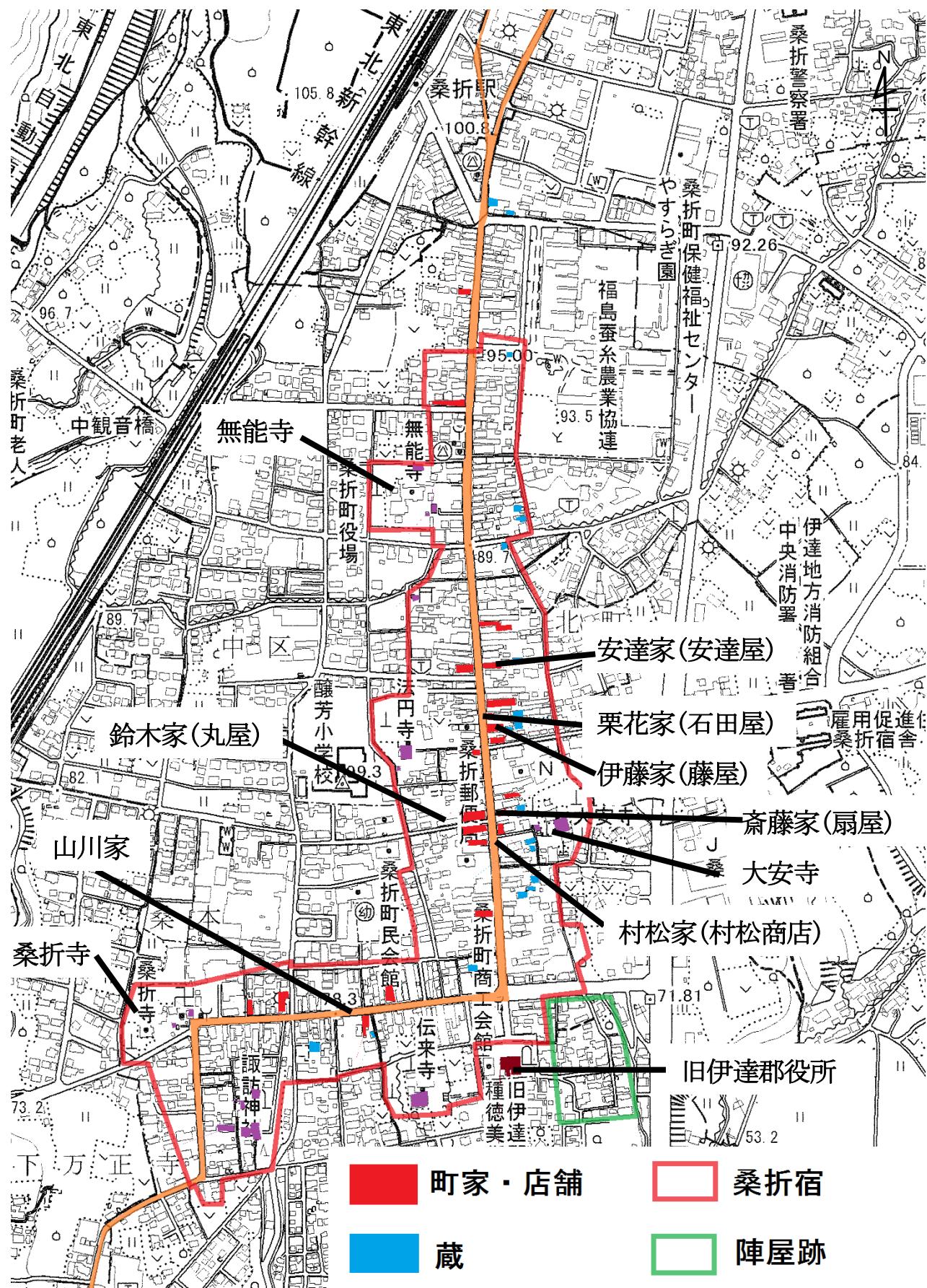
■写真 沢 大安寺山門
建立時期不明だが梵鐘は文政元年(1818)鋳造。



■写真 西町 山川家
明治建造。



■写真 新町 桑折寺山門
建立時期不明だが、桑折西山城跡旧城門といわれている。



4. 文化財等の分布状況

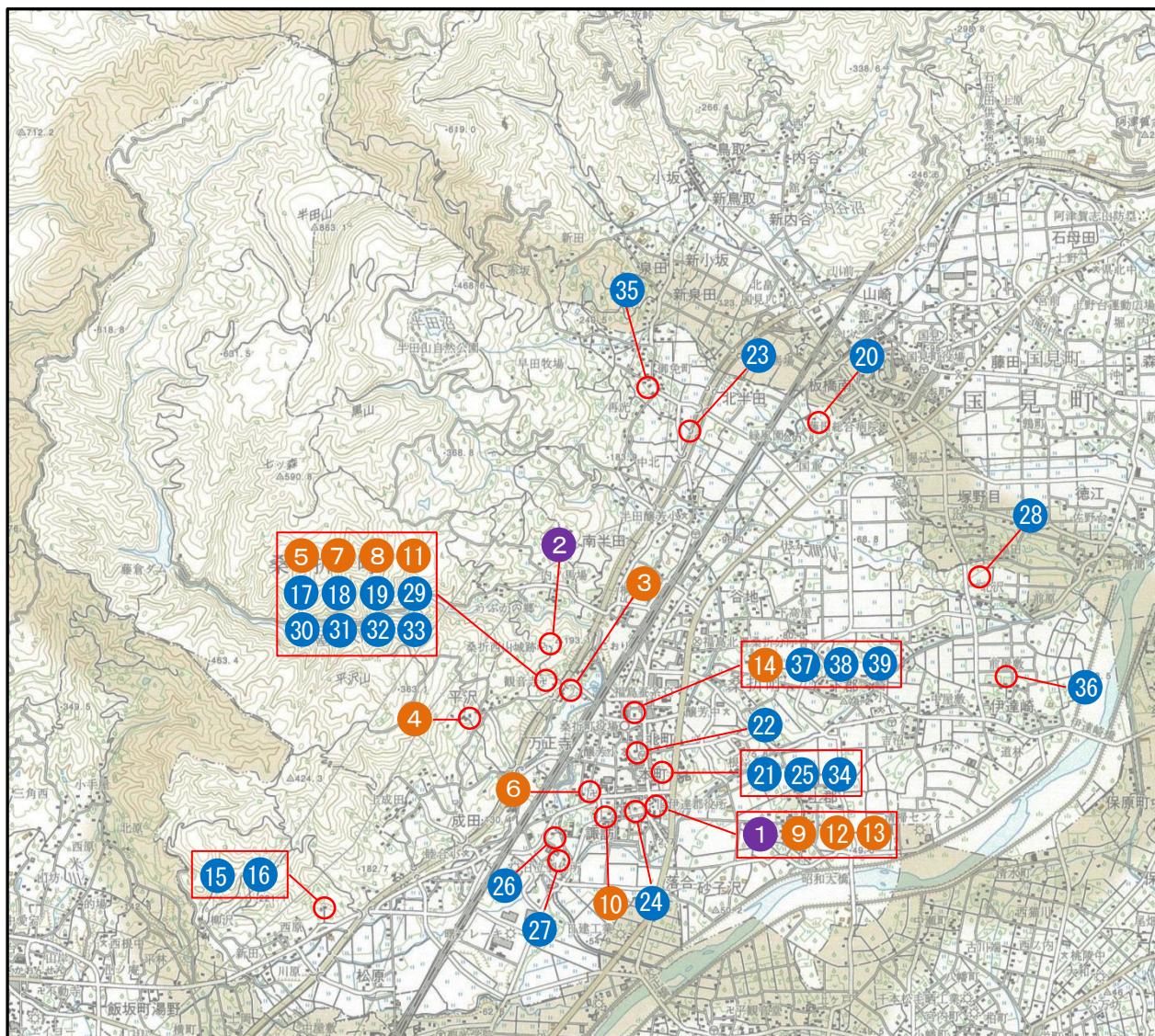
(1) 指定文化財

桑折町には、平成27年(2015)4月1日現在、国指定文化財2件、県指定文化財12件、町指定文化財25件があり、町内各地に点在している。

■表 指定文化財一覧

番号	区分	名 称	区 分	指定年月日	所 在 地
1	国	旧伊達郡役所	重要文化財	昭52・6・27	字陣屋(種徳美術館)
2	国	桑折西山城跡	史跡	平2・2・19	万正寺字本丸跡
3	県	万正寺の大力ヤ	天然記念物	昭28・10・1	万正寺字大樞
4	県	平沢寺経筒拓本	重要文化財	昭30・2・4	平沢字仲城
5	県	木造・聖観音坐像	重要文化財	昭43・12・10	万正寺字坂町(観音寺)
6	県	桑折寺山門	重要文化財	昭54・3・23	字新町
7	県	絵馬田村將軍蝦夷退治図	重要有形民俗文化財	昭55・3・28	万正寺字坂町(観音寺)
8	県	絵馬洛中洛外図	重要有形民俗文化財	昭55・3・28	〃
9	県	大樞遺跡出土品	重要文化財	昭59・3・23	字陣屋(種徳美術館)
10	県	銅造阿弥陀如来及両脇侍立像	重要文化財	平2・3・23	字新町
11	県	木造聖観音菩薩坐像	重要文化財	平7・3・31	万正寺字坂町(観音寺)
12	県	絹本着色七里ヶ浜図	重要文化財	平8・3・22	字陣屋(種徳美術館)
13	県	紙本金地著色叢竹花鳥図	重要文化財	平8・3・22	〃
14	県	無能寺の笠マツ	天然記念物	平20・3・21	字上町(無能寺)
15	町	葛の松原碑	記念物	昭45・3・9	松原字館(松原寺)
16	町	葛の松原和歌集	有形文化財	昭45・3・9	〃
17	町	木造(伝)阿弥陀如来坐像	有形文化財	昭45・6・15	万正寺字坂町(観音寺)
18	町	木造・不動明王立像	有形文化財	昭45・6・15	〃
19	町	木造・毘沙門天立像	有形文化財	昭45・6・15	〃
20	町	堰東京都祇園囃子	無形民俗文化財	昭49・6・10	北半田字峯
21	町	大安寺の梵鐘	有形文化財	昭55・3・8	字沢(大安寺)
22	町	芭蕉の田植塚	記念物	昭55・3・8	字北町
23	町	半田銀山遺跡	記念物	昭60・3・10	南半田字女郎橋跡
24	町	伝来寺の梵鐘	有形文化財	平2・3・30	字道場前
25	町	桑折代官・竹内平右衛門信将の墓所	記念物	平2・3・30	字沢(大安寺)
26	町	つつじヶ岡遺跡	記念物	平5・2・18	万正寺字天神森跡
27	町	大五輪遺跡	記念物	平5・2・18	万正寺字大五輪
28	町	錦木塚古墳	記念物	平6・4・28	伊達崎字錦塚跡

番号	区分	名 称	区 分	指定年月日	所 在 地
29	町	孝子善之丞幽冥感見の曼陀羅	有形文化財	平 6・4・28	万正寺字坂町(觀音寺)
30	町	阿弥陀三尊来迎図	有形文化財	平 6・4・28	〃
31	町	木造・十王座像	有形文化財	平 6・4・28	〃
32	町	木造・神像	有形文化財	平 6・4・28	〃
33	町	木造・奪衣婆座像	有形文化財	平 6・4・28	〃
34	町	涅槃図	有形文化財	平 6・4・28	字沢(大安寺)
35	町	早田傳之助宅 附羽州街道	記念物	平 11・2・17	北半田字御免町
36	町	蓬田半左衛門の墓所	記念物	平 11・2・17	伊達崎字岩ノ町
37	町	桑折代官・寺西重次郎封元の墓所	記念物	平 19・10・11	字上町(無能寺)
38	町	桑折代官・藤方彦市郎忠列の墓所	記念物	平 19・10・11	〃
39	町	桑折代官・島田帶刀政富家族の墓所	記念物	平 25・4・24	〃



■図 桑折町内の指定文化財の分布状況

1) 国指定文化財

国指定文化財は2件、明治期の擬洋風建築「旧伊達郡役所」及び、戦国大名伊達氏の居城であった「桑折西山城跡」である。

① 旧伊達郡役所

明治16年(1883)、町内の有志による熱心な誘致活動により桑折町に造られた。当時としては珍しい、総二階建で屋上に塔屋を持つ擬洋風建築である。大正15年(1926)に郡役所が廃止になるまでの45年間、郡行政の中心役割を果たし、そのあとは県の出先機関等として利用された。昭和52年(1977)に早期洋風官公庁建築の優品であるとして重要文化財の指定を受けたが、明治以来現在に至るまで桑折町のシンボルとなっている。

平成23年(2011)の東日本大震災により、旧伊達郡役所は漆喰壁の剥離・崩落、瓦の落下、基礎のずれなど、大きな被害を受けたが、平成26年(2014)には耐震及び復旧工事が済み、以前のままの威容を取り戻している。



■写真 旧伊達郡役所



■写真 漆喰彫刻の天井ランプ中心飾

② 桑折西山城跡

戦国時代(天文元年(1532)頃)に伊達氏14代稙宗によって築城された山城。空堀や土塁が良く残されており、平成2年(1990)に史跡の指定を受けた。南奥羽全域を巻き込んだ「天文の乱」の舞台として、さらに家法「塵芥集」制定の場所としても知られる。平成26年(2014)度まで発掘調査が行われ、平成32年(2020)に史跡公園としての開園を目指し整備が進められている。史跡指定範囲は南北約400m、東西約700m、面積は28.55haである。



■写真 本丸跡



■写真 本丸空堀跡

2) 県指定文化財

県指定文化財には、重要文化財が8件ある。建造物1件、美術工芸品5件、考古資料2件、有形民俗文化財2件、天然記念物2件からなっている。

① 木造聖観世音菩薩坐像

史跡桑折西山城麓の観音寺には、県及び町指定文化財が計13件ある。なかでも県重要文化財の「木造聖観世音菩薩坐像」は、寄木造で、正確な製作年代は不明であるが、藤原風の余波を受けた平安時代中後期の作である。鎌倉・室町時代と江戸時代に修復がなされているものの、その特徴を損なわず今に伝える優品である。享保期より観音寺秘仏として33年に一度の御開帳がなされ、最近では平成22年(2010)4月に行われた。

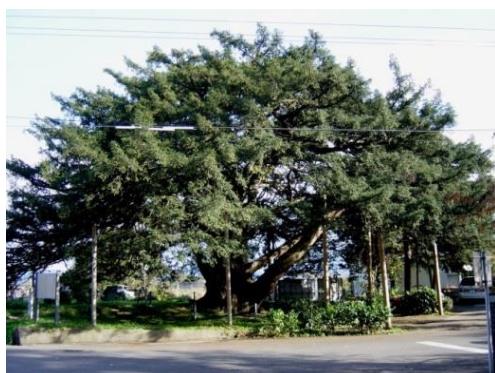
観音寺は伊達氏4代政依によって創建された伊達五山の一つであり、4院はのちに仙台に移され伊達地方には現存しないが、この観音寺だけが当地に残されている。



■写真 木造聖観世音菩薩坐像

② 万正寺の大力ヤと大榧遺跡出土品

県天然記念物の「万正寺の大力ヤ」は、観音寺東側に位置する。根回り890cm、幹回り870cmと、カヤの木としては日本一の規模を誇る。樹齢は800年ともいわれ、根元からは同じく県指定を受けている13世紀の灰釉瓶子や14世紀の灰釉梅花唐草文瓶子など、埋葬器として使用された中世の陶器が出土している（「大榧遺跡出土品」）。瀬戸産とみられる瓶子は、東海地方との交易を行うことができた伊達氏の大きな影響力が感じられ、甕と鉢は伊達氏が生産に關係したとみられている八郎窯跡（伊達市梁川町）産と推定されるもので、伊達氏とこの遺跡の深いつながりを想像することが出来る。



■写真 万正寺の大力ヤ



■写真 大榧遺跡出土品

3) 町指定文化財

町指定文化財として、記念物 12 件、有形文化財 12 件、無形民俗文化財 1 件の合計 25 件がある。

① 早田伝之助宅 附羽州街道

半田地区にある「早田伝之助宅 附羽州街道」は、江戸時代から明治にかけての豪農の邸宅である。江戸期には名主を務め、半田銀山の経営に必要な物資を調達するとともに、さらには銀山経営を引き受けるまでになった。幕末の一揆の際には、打ちこわしの対象となり、柱にはその際の傷が残されている。

早田家は羽州街道に面しており、現在でも旧街道の一部分がそのまま残されている。また、江戸時代末期には、羽州街道の難所である小坂峠の新道建設事業にも私財を投じるなど、当地において大きな役割を果たした。



■写真 早田伝之助宅



■写真 羽州街道

② 蓬田半左衛門の墓所

伊達崎地区にある「蓬田半左衛門の墓所」には、江戸時代の寛政一揆の首謀者の一人である蓬田半左衛門が葬られている。名主または組頭を勤めた有力家の出身であったとされる半左衛門は、不作時の年貢徵収法に反対し、一揆の首謀者の一人として死罪に処せられた。

かつては墓碑が北向きに建てられていたが、一揆の首謀者がどのように扱われていたかがわかる事例である。戦後、義民顕彰会が結成されて、南向きに直され、石造の台座を設けて周辺を整備し現在に至る。



■写真 蓬田半左衛門の墓所

③ 堀東京都祇園囃子

江戸時代半ば、半田銀山の鉱夫であった笠松某が、祭礼の活性化、鉱毒の鎮静化を祈願するため、疫病平伏の御利益があるといわれる京都の八坂神社の祇園囃子を習得し、広めたといわれている。半田銀山の地元である半田地区の祭り(益子神社、八幡神社)では、神輿や屋台の運行に合わせ祇園囃子が演奏される。



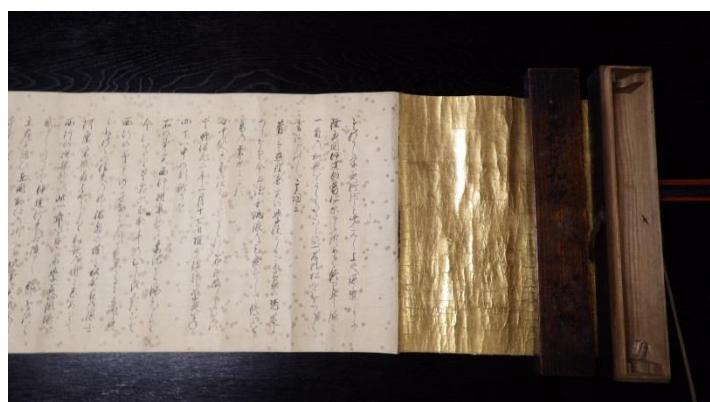
■写真 堀東京都祇園囃子

④ 葛の松原碑・葛の松原和歌集

大字松原付近は、西行法師の作とされる「撰集抄」によると、後二条天皇(院)の皇子であった覺英僧都が入寂した「葛の松原」ゆかりの地といわれる。松原寺には、明和5年(1768)、覺英の遺徳を称えるため「葛の松原碑」が建立され、記念に編集された「葛の松原和歌集」が納められた。江戸期の桑折を含む信達地方に、文芸や俳諧の文化が根付き、花開いていたことを示す貴重な資料である。覺英僧都が「世の中の人にはくずの松原といはるゝ身こそうれしかりけれ」と詠んだように、周辺はかつて松原が広がる地であったと思われるが、西根堰の完成による耕地化や窯業、虫害などにより徐々に消失していった。



■写真 葛の松原碑



■写真 葛の松原和歌集

4) 未指定文化財

未指定の文化財としては、現在、20件が保存を講ずべき貴重なものとして候補に挙げられている。

① 伊達朝宗の墓所

大字万正寺字下万正寺にある、伊達氏初代朝宗の墓所である。この場所は朝宗が建てた「満勝寺」跡と考えられており、現存する五輪塔は、江戸時代に仙台藩主伊達氏によって建てられたものである。仙台藩は参勤交代の折、この場所に寄り、墓参をしたと伝えられる。



■写真 伊達朝宗の墓所

大字伊達崎の満蔵寺馬鳴堂に安置されている。養蚕の守護神として信仰を集め、現在の像は安政2年(1855)に上野国からもたらされたものと伝わる。馬鳴堂は如来堂とも呼ばれ、堂の一角を使って開発された蚕種「如来堂」銘柄の由来となっている。

② 木造馬鳴菩薩像

大字谷地字追分にあり、奥州街道より羽州街道が分岐する場所である。「商家高名鑑」にある歌川國景の挿絵によると、石造の道標に歌碑と庚申塔、柳の木と休処が描かれている。ここにあった石碑は、明治維新後に谷地村の村社であった巖島神社や定龍寺に移されてしまったが、道標が巖島神社周辺の水道工事の際に発見されたのを機に、追分にあった柳の句碑や庚申塔とともに復元されている。



■写真 羽州街道追分

その他、指定文化財候補としての未指定文化財一覧表に登載されていないものでも、土木学会選奨遺産である「西根堰」や伊達崎地区を中心に数棟残存する江戸時代後期～近代の養蚕農家住宅、桑折市街地に残存する土蔵造の見世蔵等の建造物、近代化遺産である銀栗地区の亀腹水路等、数多くの貴重なものが残されている。

(2) 桑折町をつくってきた主な人物

① 伊達朝宗 (1129年～1199年)

平安時代末期から鎌倉時代初頭に活躍。源頼朝の有力御家人の一人で、もともとは常陸国伊佐荘(現茨城県筑西市)や下野国中村(栃木県真岡市)を領地としていた。出家して常陸入道念西と称した。頼朝が奥州藤原氏を攻めた際、4人の息子とともに石那坂(福島市)で藤原氏の重臣佐藤氏一族の軍勢を破り、戦後、伊達郡の地頭となり、いち早く現地に入部したと伝

わる。この時、伊達氏を称し、その初代となつたとされている。

最初に本拠を構えたのは阿武隈川東岸の高子岡とされるが、まもなく、頼朝が奥州藤原氏追悼のため建立した永福寺と同じ文様を持つ瓦で屋根を葺いた寺院を現大字万正寺字下万正寺に建立するなどし、本拠地化を図った。娘を頼朝の側室とするなど、鎌倉御家人として最初期に東北地方で活躍の痕跡が確認されている人物である。

② 伊達稙宗 (1488年-1565年)

伊達氏第14代当主。中央との結びつきや近隣大名との戦い、さらに婚姻外交を織り交ぜて勢力の急激な拡大に成功し、前例のない陸奥国守護に任命され、東北地方最大の大名となつた。阿武隈川対岸の梁川城を居城としていたが、仙道（後の奥州街道）が通り、米沢盆地にも行きやすいという交通の要衝である桑折に、陸奥国の守護所（陸奥国の政治を行う場）及び伊達氏の居城として西山城を築いた。ここで稙宗は家法「塵芥集」を制定し、租税台帳の「段錢帳」を整えた。

天文11年(1542)、稙宗の政策に反発した嫡男晴宗や家臣団らにより、伊達家や周辺諸大名を二分した合戦「伊達氏天文の乱」が起こる。最終的には嫡男晴宗が家督を継ぎ、稙宗は丸森（現宮城県丸森町）に隠居を余儀なくされた。

③ 古河善兵衛と佐藤新右衛門（江戸初期）

古河善兵衛重吉は米沢藩の福島郡代、佐藤新右衛門家忠は東大枝出身の郷士で、桑折村で伊達郡西根郡役を務めていた。

二人は新田開発のため、西根郷（現桑折町、現国見町、現福島市及び現伊達市的一部分）に西根下堰と西根上堰の開削を計画し、私財を投じて工事を行った。上杉氏減封による財政事情の悪化の中、両堰合わせて全長43kmに渡る大工事を完成させ、多くの新田を開発した功績は大きく、藩財政の建て直しにも貢献したという。

その後、協力して堰を完成させた二人は、西根神社（現福島市湯野）に祭神として祀られた。



■写真 伊達朝宗肖像画
(仙台市博物館所蔵)



■写真 伊達稙宗肖像画
(仙台市博物館所蔵)



■写真 左：古河善兵衛、右：佐藤新右衛門
(『桑折学のすすめ』より)

④ 三島通庸 (1835年-1888年)

鹿児島県出身。戊辰戦争後は藩政改革に参加し、のち明治政府のもとで東京府参事、教部大丞、鶴岡県、山形県、福島県、栃木県の県令、内務省土木局長、警視総監などを歴任し、維新の功により子爵を受けられた。

明治13年(1880)に米沢～福島間に栗子街道を完成させたことで、山形からの輸送路が変化した結果、それまで山形方面への主要道として使われていた羽州街道は廃れることとなった。

山形県令時代、擬洋風建築の県庁・病院・学校などを多数作り、都市の再整備を行ったのち、明治15年(1882)に福島県令に着任する。旧伊達郡役所や警察署、戸長役場が桑折町に造られたのはこの時期に該当する。擬洋風建築で造られた官庁が町の主要部分に位置するという明治期桑折の新しい町づくりには、三島の強い影響を感じられる。また、梁川新道や飯坂新道など、町内に新しい道路が造られたのも同時期である。

⑤ 五代友厚 (1836年-1885年)

鹿児島県出身の実業家。新政府では、官僚として大阪に造幣寮(現・造幣局)を誘致し、初代大阪税関長となるなどの活躍を見せた。

退官後は、紡績業・鉱山業・製塩業・製藍業などの発展に尽力する。薩長藩閥政府との結びつきが強く、政商といわれた。他にも、大阪株式取引所(現・大阪証券取引所)、大阪商法会議所(現・大阪商工会議所)、大阪商業講習所(現・大阪市立大学)、大阪製銅、関西貿易社、共同運輸会社、神戸桟橋、大阪商船、阪堺鉄道(現・南海電気鉄道)などを設立した。

明治政府は国策上、鉱業を重視しており、五代も次々と開発着手し開坑していった。明治6年(1873)、鉱山経営の規模拡大を図るため、資金を投じて「弘成館」を創設し、翌7年(1874)には半田銀山の経営を始めた。半田銀山の増産には国の支援が必要として、明治9年(1876)には明治天皇の行幸を実現させた。



■写真 三島通庸



■写真 五代友厚